
とある物語の魔神皇帝

漆黒龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある物語の魔神皇帝

【Nコード】

N9041N

【作者名】

漆黒龍

【あらすじ】

『炎の三日間』から数十年。世界の傷は癒え平和を取り戻しつつあった。新たな物語が学園都市で始まりを迎える。

1 序(前書き)

無謀にも『とある』を始めてみる。

頑張るぜ。

たぶん。

1 序

1997年

季節は夏が終わり、秋が近づき紅葉が色つき始めた頃。
時間は昼を過ぎた時だった。

太平洋上に突如動く要塞のような島が出現。

出現から数分、Dr・ヘルを名乗るテロリストから世界へ向けて宣言
戦布告。

共に、機械獣と名付けられた巨大ロボットが世界各国に襲来。
各国は迎撃を試みるもことごとく失敗。

戦車は抵抗虚しく巨大な足に潰され、有人戦闘機は成す術無く飛行
型に墜され、
無人、無線、電波コントロール兵器はそのコントロールを奪われ、
頼みの綱の核兵器も謎の現象でコントロール不能に陥り、人類に残
された手段は無くなった。

僅か一日で、僅か数時間で世界はDr・ヘルの手落ちるかと思わ
れた。

同日 夜 日本 東京湾付近

何故か知らないが日本を最後にと決めていたらしく、夜に機械獣の
殆どを引き連れ上陸。

自衛隊など在于て無いが如く、武力による抵抗は皆無だった。

無謀にもある程度の人々がDr・ヘルに対し講義運動を起こすも、

機械獣の姿を自らの目で見た瞬間、蜘蛛の子を散らすように逃げる。

全ての人々が終わったと思った。

その時であった。

同日 Dr・ヘル日本上陸より数十分後

ソレは空から飛来した。

紅の翼を広げ、黒鋼のボディを煌かせ、機械獣軍団の前へと悠然と降り立った。

機械獣とは似ても似つかない、巨大な黒鋼の巨人だった。即座に機械獣軍団は黒鋼の巨人に攻撃するも傷一つ付けられず、黒鋼の巨人は圧倒的な力を持って、機械獣軍団を薙ぎ倒していった。機械獣という人知を超えたモノをなぎ倒す黒鋼の巨人は人々の目にはヒーローに映った。

黒鋼の巨人の数回の攻撃で機械獣軍団はほぼ壊滅。

それを見たDr・ヘルは飛行型に乗り、要塞島に撤退。

黒鋼の巨人は紅の翼を呼び戻し、Dr・ヘルの後を追う。

ここからは遠目からの確認のため、大まかな文になってしまいが悪しからず。

一筋の光りが要塞島に向かう…。おそらくあの黒鋼に巨人だろう。同時に要塞島の迎撃装置が作動するが驚異的な動きで回避し、島に降りる。

おそらく、残りの機械獣を総動員したのだろう、爆発音、衝撃音がかなり離れているにも関わらず聞こえてくる。しばらくそれが続き、パツと数分間音が鳴り止む。

終わったのか？

と思い、しばらく見つめていると島が突然空高く上がる。島があつた海上を見れば、あの黒鋼の巨人がいた。

まさか、放り投げたのか！？

おそらくその通りだろう。

人も十分住める広さがある島を空高く放り投げる。

凄まじいパワーだ。

しかしそれで終わりではなかった。

黒鋼の巨人が輝き、光が広がった。

目を開け、見てみると島が消えていた。

どうやら先ほどの光りで島を跡形も無く消し去ったようだ。

ふむ、書いている内に私はどうやら慣れてしまったようだ。

あの黒鋼の巨人の力…

あれを目の当たりにすれば大体の人が開いた口が塞がらないだろう。私も最初はそうだった。

今となっては、もうどうでもいいことなのだが。

それを確認すると、黒鋼の巨人は空へと消えた。

終わった。

それを見た瞬間、そう思った。

不思議と笑みがこぼれた。

同時にあの黒鋼の巨人に向けて感謝を叫んだ。
同伴した数名のスタッフも同じく叫んだ。

早く家族の下へ帰ろう。

そう思った。

しかし、その安心も一瞬で終わる。

次の日 太平洋 ハワイ諸島沖

ミケーネ帝国を名乗る侵略者が出現。
世界は再び混乱の渦へと入るが…
しかし、人々には希望はあった。

マジンカイザーだ。

彼は再び空から現れ、
ミケーネ帝国の前に立ちはだかり、世界を守るために戦闘を開始した。

やはりその力は絶大なモノだった。

苦戦と言つ言葉が似合わない。
善戦と言つ言葉も似合わない。

もはや圧倒的だった。

Dr・ヘルが誇る機械獣より遙かに勝る、戦闘獣を打ち倒したゆく。
暗黒大將軍を名乗るミケーネの支配者も多少は耐えたものの、
マジンカイザーの炎によって消し炭すら残らず消え去った。

余談だが、マジンカイザーの胸の赤い板からでた炎。

『ファイヤーブラスター』と言つらしい。

そう叫び声が聞こえたのでおそらく合っている。

科学者が温度を計測したところ、太陽より高温だったことが判明。
周りにいた科学者も含め発狂しだし、拳句の果てに三日間くらい気
絶してしまったようだ。

なお、東京湾での戦闘中の会話より判明。

黒鋼の巨人の名は『マジンカイザー』。

紅の翼は『カイザースクランダー』。

この三日間を後に『炎の三日間』と名付けられた。

マジンカイザーが現れ、Dr・ヘル率いる機械獣とミケーネ帝国の
戦闘獣の戦闘を繰り広げた期間を、
マジンカイザーから取り『魔神戦争』と名付けた。

なお、建設途中の学園都市、魔術協会各所はこの関与を否定。

「我々でもあんなモノを作るのは無理だ」

とのこと。

なぜマジンカイザーは我々を助けてくれたのか、

真相は謎のままだが、断言できるのは彼は味方だということだけだ。

とある警部の報告書より

星運河社発行 『炎の三日間』 魔神戦争の項より抜粋。

半月後、魔術協会の文を削除された改訂版が発行される。

- - - - -

その日、雨のカーテンが日を遮り、水の音が延々と続くと思つくりの大降りの日。

「雨…か」

あるマンションの部屋の中。
黒長髪の青年は窓の外へと目を向けて、今日の第一声。

ココは学園都市。

東京都西部に位置し、
東京都のほか神奈川県・埼玉県・山梨県に跨る円形の都市。
総面積は東京都の約3分の1に相当する巨大都市で、総人口は約230万人、その8割は学生。
まさに学園都市である。

技術面も外界とは数十年の差があり、言い換えれば未来都市でもある。

あの『炎の三日間』より、数十年。
あの三日間で負った世界の傷は癒え、日常は元に戻りつつあった。

新たな物語はココ、学園都市で始まりを迎える。

1 序（後書き）

まずは序。

次の次位から絡むと思う。

では、また。

2 なんてことはない、コロでの日常（前書き）

SKLのカイザーのデザインはイマイチ好きになれない。

FもOVAもデザイン好きだけど、

一番好きなのは真対ネオの特典映像内のカイザーのデザインが好き
だったりする。

ニコニコにもあるんで知りたければ是非。

どぞ。

2 なんでもことはない、ココでの日常

朝方の雨は止み、たいして蒸し暑くもならず少し涼しい日になった。

そんな日の夜の話。

.....

「……すっかり遅くなっちゃったな」

夜の摩天楼を一つの黒い影が翔る。

ビルの屋上を足場にし、次々とその歩を進めていく。

普通の人じゃついたらまず即死するだろうアクロバティックな動きで、ココ学園都市でもこんな真似をできる者はそうそういない、と思っ

川と橋が見え、もう少しで家に着くな。

と思っていた時、川岸で何か光るモノが見えた。

目を凝らせば人が二人居るのが分かった。

しかも一人は彼の親友、上条当麻ではないか。

もう一人の、恐らく電撃を出している方は見たことはない女の子。

とりあえず、このまま見ているのも忍びないので割って入ることにする。

戦闘は終了したが、いまだに痴話喧嘩のような口論をしている二人の間に落ちる。

「よっ」

「うおッ!？」

「キャッ!？」

案の定、二人は驚き面白い声を上げる。

おまけで女の子の方は電撃を飛ばしてきたがとりあえず避ける。

「痴話喧嘩か？当麻」

「ばっ!？そんなんじゃねえよ」

「そうか？ただのバカップルの軽い喧嘩にしか見えなかったか？」

そう言った瞬間にまた電撃が飛んでくる。

緋延はバックステップで避け、当麻は右手で掻き消す。

「ちょっと、なんなのよあんだ!！」

「こら、危ねえだろうがビリビリ」

「あんたまでビリビリ言うか!！」

と叫び、今度は手当たりしだい電撃を飛ばす。

ヒラリヒラリと緋延は避け、当麻はいつもの口癖を言いながら右手で掻き消す。

「なんで当たらないのよっ!！」

「当たつたら危ないでしょうがー!!」

「まったくだ、当麻の言う通りだ」

「そりゃそうだけど……ってそうじゃなくて!!」

むきー!!と言いながら足をダンダンやっている。

そんなのほつとき、帰ろうかなあと思い当麻に声を掛ける。

「帰らねえか、当麻」

「上条さんもそう思っていたところですよ、**緋延**」

と小声で言い合い、頷き合う。

当麻はじりじりと緋延の方に近づく。

「だいたいねえ、いきなり降ってきたあんたは…あれ？」

二人から意識を反らして、何か考え事をし、

ハツと思いつき再び前を向いたのだが肝心のその二人がいない。

「に……逃げられたー！ーッ！！」

くそつたれー！なんなのよ、もうっ」

下品な言葉が混じったがそこは気にしてはならない。

夜の河川に名門常盤台のお嬢様、レベル5超電磁砲・御坂美琴の
声
が木霊する。

.....

「で、帰ってきたはいいが何があったんだ？当麻」

「いやー、それがですねえ……」

とりあえず上条の上の階、俺の家に着き事情を話してくれた。

「なるほど、彼女がお前の言っていたシツコイ奴だったんだな」

「そ、何かとタイミングが悪くて……」

「そりゃ今回に限ったことじゃないだろ」

「つく……、そーですよー不幸ですよーだ」

口を3にし部屋の隅に体育座りし、ブツブツ言い出した当麻。

「ほら、晩飯作るんだから手伝えよ」

「へいはい、今日は三人前ですか？」

「なんだその返事は!？」

ああ、もうじき着くそーだ」

「りよ〜かい」

そうして…悲しいかな、男二人で台所で夕飯を作り始める。
ピー、と炊飯器が完了の音を出す。

多少遅くなる事を考慮して予約しといたのでバッチリだ。
もうすぐ夕飯も仕上がる。

その時…コンコン、とドアが叩かれる。

「お、来たみたいだな。

当麻、こっちはいいから食器とアイツを入れてやってくれ」

「おう、わかった」

そこまで離れていないので数歩で玄関に到着、鍵を開けドアを開ける。

そして、そこに立つ人物に声を掛ける。

「よう、一方」

「ああ？当麻か」

そう、学園都市の頂点に君臨する第一位、一方アクセラレータ通行が最後の一人である。

この二人、知り合ってからほぼ毎晩のように緋延の家に夕飯を食べに来ている。

一人で食べるよりも大勢で。

緋延は昔からそう思っているのもむしろ歓迎している。

ほとんどの食材も当麻が一方が用意して来るので金もかからない。

作るのは殆ど緋延なのだが…。

当麻は、

「緋延の方が上手いじゃん」

と言い、一方は、

「オメエの味が気に入っている」

だそうで。

まあ、一人分作るのも三人分作るのも大した苦勞はしないので緋延の方は問題無い。

「お、今日はハンバーグかア。チーズあるか？」

「心配すんな、今日のはチーズinハンバーグだ」

「そいつア楽しみだ」

ひょこつと顔だけ出し、そんな会話をし一方は居間に向かう。

一方は飲み物を買ってきたらしく、2Lのペットボトルを数本机の上に置く。

当麻も食器を並べ終え、座布団の上に座りテレビをつける。

緋延も丁度焼きあがったらしく、フライパン片手に来た。

手際良く各々の皿に盛り付け、コーンクリームスープを置き、ご飯をよそり、準備が完了した。

「相変わらずの手際だな」

「ほんと、上条さんはレストランのバイトをお勧めするよ」

「ん、遠慮しとくわ。今のとこ金には困ってないし。さ、食うか」

そして、食事の時は必ずこの言葉を言う。
己の糧となったモノへの感謝を。

「「「いただきます」」」

そんなこんなで、夜が過ぎてゆく。

彼らにとっての、いつもの夜が。

2 なんでもことはない、コロでの日常（後書き）

今回は特に動き無し。

次回は恐らく、超電磁砲に入る。

3 虚空爆破事件（前書き）

こっちの方が早く仕上がってしまった。

佐天がかわゆい。でも今回は出番無し。

では、ごんご。

3 虚空爆破事件

次の日

暑さもそれなりに、夏の一日になりそうだ。

ココ最近、学園都市を騒がせている連続虚空爆破事件。

アルミを基点に、重力子を急激に加速させ一気に周囲に撒き散らす。簡単に言えば『アルミを爆弾に変える』能力者による犯行。

犯行自体も悪質で、ゴミ箱の中のアルミ缶を爆発させるのはカワイイ方で、

ぬいぐるみの中にアルミ製スプーンを入れ、爆発させるケースもある。

ぬいぐるみ、子供にとって興味を引く存在。

それを知ってか知らずか、犯人の犯行対象は年齢に関係無く行っている。

重力子反応を事前に観測できるため、死者こそ出していないが怪我人は数十人を超える。

しかし、大体の間人はどこか自分は大丈夫と思っている節がある。

それはココ学園都市に、普通³に暮らしている人達にとっても他と同じである。

さて、今巷を賑わせている連続虚空爆破事件、それは今日で終わりを迎える事になる。

Seventh Mist

全国的に展開している洋服のチェーン店である。

品揃えは老若男女問わず幅広く扱っていて、服のデザインもおしゃれな物からかわいい物まで、

値段も手頃でココ学園都市でも人気店の一つだ。

ココ学園都市店は一階が女性向け、二階が男性、三階が子供となっている。

当麻、緋延、一方は学校の帰り道、Seventh Mistに行きたいという幼稚園くらいの少女に遭遇。

聞けば、雑誌を見てオシャレならココ!!と載っていたらしく、

「わたしもオシャレになる!!」

と意気込んだはいいものの、

地図を見ても判らずたまたま通りかかった三人に声を掛けた、てのがここまでの流れである。

緋延は休日よく散歩をしているのでこの場所を知っていて、特に迷う事無く見つかった。

着くなり少女ははしゃぎ、大喜びで中へ入っていく。

緋延は急いでそれを止め、注意する。

「なあに? ひえんおにいちゃん?」

「なに、一つ忠告を」

「?」

不思議そうに、首を傾げる。

「お洒落なレディはそう、おおはしゃぎしないでクールにいくもんだぜ」

「クーる…」

わっかたよ、おにいちゃん！わたしクーるになるっ！！！！」

「よし、いい子だ。」

あと迷子にならないように当麻と手をつないでいような」

「うん、わかった！！」

目を輝かせ、コクコクと頷きながら元気に少女は言う。

そして少女を当麻に任せ、一方、緋延は二階に行くと言い別れる。

そして二階に向かう階段を上がっている途中、一方が口を開く。

「相変わらず慣れてるじゃねエか、緋延」

「ハハ、俺は好きだからな、子供が」

「そオいやアそうだったな。」

俺達との待ち合わせで俺と当麻が遅れた時に、公園の子供達と一緒に缶蹴りしてたなア」

「あの後お前と当麻も混じって楽しんだけどな」

「ありやなかなか楽しめたぜ」

「一回、お前が飛ばしすぎたけどな」

「ああ…、あれは加減を間違えたんだよ」

「おかげで人気者になったじゃねエか」

「ありやまいったぜ…、親が来てくれなきゃ危なかった」

「何が？」

「…精神が」

そんな会話をしながら階段を上がりきり、服を物色している時、荒い声の店内放送が響く。

内容は例の連続虚空爆破事件がココで起こるらしい。店員の指示に従い客が次々と店の外へ出て行く。

緋延と一方は顔を見合わせ、頷きあう。

同時に一階へと走り出す。

「…嫌な予感がするな」

「お前エのソレはマジで的中率100%だから困る」

その会話を最後に、無言になり走って階段を無視して”飛ぶ”。
緋延は ダアン！！ デカイ音を立てて着地し、一方は反射を使い音も無く着地、
再び走り出す。

階段からフロアまでは微妙な遠さ。

混雑時だったら苦勞するかもしれないが幸いにも客は全員外に避難している。

数秒でフロアに到着、目に入ったのはさっき案内した少女がぬいぐるみを抱えて、

頭に…花！？ を乗せた女の子の目の前で喋っている光景だった。

同時に、あのぬいぐるみを見た瞬間に嫌な予感が体を駆ける。

あれだ。

そう確信した。

息を素早く吸い、自分が出るであろう最大音量の声を出そうとした時、

花の女の子がぬいぐるみと少女を引き剥がし、守るように抱えながら叫ぶ。

「あれが爆弾ですっ！！逃げてください！！！」

遅かった。

見れば、ぬいぐるみがみるみるグロテスクな収縮で小さくなっていく。

女の子は抱えながらでは動けない。

まずい！

あの様子じゃあと一秒もしない内に爆発する。

対角線上の当麻が動く、目と胸が赤く光り緋延は腕だけ”なり”、一方はその様子をまだ観察している。

ぬいぐるみが爆発する。

当麻は右手を前にかざし、女の子と少女を守る。
緋延は腕を店を破壊しない程度に巨大化、爆弾を手で握り潰す。
そして…

- - - - -

私は冷や汗を流した。

体が一気に冷たくなるのが分かる。

超電磁砲レールガンで爆弾を吹き飛ばそうと思い、ポケットの中のコインを取り出そうとし、

焦ってコインを落としてしまった。

そのせいでろくに演算も出来ない。

それくらい焦り、パニックを起こしていた。

けど、アイツが初春とあの子の前に出てあの訳の分からない右手で守った。

驚いた。

やっぱりあの能力反則じゃない！？ と思ってしまった。
けど、もっと驚いたのはこの後だった。

巨大な…

巨大な黒い手が爆弾を握り潰したのだ。

錯覚かと思ったけどそうじゃない。
確かに見た。

巨大な…黒く光る鋼のような腕を。

しばらく呆然としちゃったけど、すぐに初春と女の子も一緒に外に出る。

初春は私が守ってくれたと勘違いしている。
女の子の方は、

「くろいおつきい手がまもってくれたんだ!!」

と言っていた。

それは秘密にしようね。と言って口止めしておいた。
それから、路地裏で大笑いしている犯人を見つける。

蹴り飛ばしてやろう、と思い路地裏に入った時、上から何か降ってきた。

「ぐぼうあッ!!」

降ってきたのは白髪が目つきの悪いひよろい男で、ソイツが犯人を蹴り飛ばした。

「オメエかア…今回の犯人は」

「な、なんだお前は!!」

白髪の男は私のことなど最初から眼中になど無く、
少し考え、しょうがないかの様に答えた。

「おオ？」

「あア、まア名乗ろうか…」

冷や汗が流れる…そんな笑みを浮かべ、両手を広げて名乗った。

「ココ学園都市で第一位をやっている一方通行だ。よろしくウ」

「…は！？」

「…ええ！？」

私と犯人は一瞬呆けてしまった。

信じられなかった。

コイツがあアクセラレータの一方通行！？

目が合った。

一方通行は私を見て一瞬だが目を見開たが、すぐ元に戻る。
そしてこう、言った。

「あア？誰だおま…」

「…お前、オリジナルか。…そうか…」

何を言ってるんだらう？

言葉の意味がさっぱり分からなかった。

何故、そんな悲しそうな顔をしているのかも分からなかった。

そう考えてると、一方通行は凄まじい速度で犯人に突っ込み殴った。
見事なアッパーだった。

男は上に10mは飛んだだろうか。
思わず、わー。　と言ってしまったが。

気にしないで。

「悪いな」

その言葉とは裏腹に、獰猛な笑みを浮かべていたのは気のせいだろうか。

男がごみ箱の上に落ち、それを確認すると一方通行は去ろうと歩き出した。

「…あー!!」

ま、待ちなさいよっ!!」

すると、一方通行は立ち止まり、小さく溜息を吐き、こっぴどい。

「ウゼ」

その一言で私はキレた。

電撃を喰らわしてやる。

そう考え、電撃を放とうとしたら、もうその姿が無かった。

「ま…またかあー…!!」

これで勝負を吹っ掛けたヤツに逃げられるのは何回目だろうか。

私は手当たり次第に電撃を放った。

後で黒子に怒られた。

不貞寝した。

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

眠りに落ちる時、ふとあの時一方通行が言った言葉が浮かんだ。

オリジナル。

その時は気にならなかった。

その言葉の意味が分からなかった。

その言葉の意味を知ったのは、それからかなり後のことだった。

3 虚空爆破事件（後書き）

次回、緋延は目を付けられます。黒子に。

零の軌跡、面白いな。

感想待ってる。と思う。

では、また次回。

3・5 考察(前書き)

短いよ。

じ〜ぞ。

3・5 考察

ジャッジメント
風紀委員。

ココ学園都市で有志による原則として校内を管轄とする治安維持機
関。

アンチスキル
警備員のように大人のみの構成ではなく、学生主体の組織である。

決定的に違うのは能力者がいること。

アンチスキル
そのせいか、警備委員よりも

ジャッジメント
風紀委員のほうが役に立つ、と思われている。

アンチスキル
しかし警備員の管轄は校外なのでそんなことはない。

アンチスキル
むしろ任務の危険度としては警備員の方がはるかに上である。

ジャッジメント
前置きは終わり、場所は風紀委員第177支部へと写る。

先日の虚空爆破事件を無事に終え、やっと一息一安心…とはいかなか
ったのです。

申し送れましたの、わたくしは白井黒子と申しますの。

お姉様：御坂美琴の従僕を勤めさせてもらっていますの。

何故、わたくしが先日の事件の店の防犯カメラの映像を凝視してい
るのかと申しますと…

今朝のお姉様の会話を聞いていただければ理解できますの。

それは…

「ねえ、黒子。お願いあるんだけど聞いてくれない？」

「お姉様のためならなんなりとっ！！」

決して黒子の想像していることじゃないと思うが。

「良かった。あのさ、この前の防犯カメラの映像見せてくれない？」

「？何故ですか？もう事件は解決いたしましたのに…」

「…ちよつと気になる事があってさ」

「…！！まさか男ですか！？」

いけませんわお姉様っ！お姉様にはわたくしがいるではありませんs」

瞬間、白井の頭に拳骨が降りる。

鈍い音と共に、黒子が涙目になりながら蹲る。

「うう…今日はいつにも増して痛いのです…」

「まったく…じゃ、たのんだわよ」

「わかりましたの」

…という訳ですの。

で、その肝心の防犯カメラの映像なんですが…

初春が女の子から爆弾入りぬいぐるみを引き剥がした時、お姉様含め、動いたのは三人。

一人は勿論お姉様、二人目はツンツン頭の男、三人目は黒長髪の男…

正直、この映像は見ない方が…いえ、もう見てしまったので遅いですの。
我が目を疑いましたわ。

この黒長髪の殿方…目と胸が赤く光ったと思ったたら両腕が黒い金属のようなモノに変わりましたの。
物質変換？身体構造の再構築？変身？

…分かりませんわ。

映像は何故かここで途切れている。
本体は全くの無傷なのに。

映像だけ、ココから数十秒途切れている。
そして黒子は考える。

この映像はお姉様に見せるべきか否か。
バンク書庫にも載っていない、未知の能力者。

約束はしたがこの映像はあまりにも異質すぎる。
はたして能力と言っているのかすらも疑問だ。
そして、黒子は丸一日このことを考え、映像を削除することを選択する。

後日、美琴に映像はカメラが壊れていてダメだったと報告する。

しかし、出会いとは必然である。

本人が望もうが望まずとも必ずやってくる。

そういうモノなのだ。

3・5 考察(後書き)

眠い…

今日なんかポカポカしてる気がする。

次回、あの子の影が…

4 二十日 出会い ー (前書き)

こっちの方が仕上がってしまっ…。

ふむ…

とぞ。

4 二十日 出会い 一

本日も暑い。

今日は七月二十日

そう…歯車が噛み合い、動き出す日である。

時間は11時を回ったところ。

予定も特に無いので緋延は朝から散歩をしている。

当麻は補修、一方はあと一時間後に合流という手筈になっている。

格好は緋延にとってはいつもの。

左右の足の方にポケットが縦に二つ付いたカーゴパンツ、

タンクトップに腕めくりYシャツという格好だ。

ちなみに全部黒である。

ブラブラ歩いていたがコレといって面白いモノも見つからず、

いつものようにWalkmenを作動させ、ミクを聞きながらファミレスを通り過ぎようとしていた。

たまたま店内の見知った顔と目が合った。

「あ…、あん時の」

読唇術でそう言っているのが判った。

たしか…ビリビリだったか。

見れば、大人の女性一人、ビリビリと同じ制服が一人、違うのが二人。

その内二人が腕章で風紀委員と判る。

そんなビリビリこと御坂美琴につられて全員の視線がコチラに向く。一人を除いて、全員が誰だろう？という顔になる。

白井黒子だけは驚いた表情をしていた。

緋延としては何故そんな顔をする？くらいしか思わなかった。美琴が手招きをしている。

まあ、やることもないし腹も少し減っているしな。

断る理由も無いので誘いに乗ることにした。

「よう」

「まさかこんな所で会うとはね」

「まあな」

「あの一……」

二人で軽い挨拶を交わしていると長髪の女の子から声が掛かる。

「ん？」

「あ、ごめんね佐天さん」

自己紹介もせずに話し込んでしまうところだった。

とりあえず座らせてもらい、

「黒鋼^{クロガネヒエン}緋延だ、よろしく」

「一樣言つとくけど御坂美琴よ」

「じゃあ美琴な、年下みたいだし」

「まあ…いいわよ」

ビリビリ改め美琴と呼ぼう。

「白井黒子ですの」

「ああ、よろしく」

ツインテールだな。

なぜそんな探るような目で見る？

まあいい。

「初春飾利です」

「会うのは二度目だが話したのは初めてだな」

「え？どこかでお会いしましたっけ？」

「ああ、会ったって言っても見かけた程度だがな。頭の花が特徴的だったんでな」

この前の花の子か。

「佐天涙子です。ちなみにレベル0です」

「よろしくな、因みに俺はレベルすらないぜ」

「「「ええ!?!?!」」」

佐天、黒子、美琴が声を揃えて驚く。

「マジだぜ?」

黒髪ストレート。

俺と同じ位長いかな?

まあ俺のはサラサラストレートじゃなくてツンツンだけど。
いいね。

「木山春生だ」

「よろしく」

これまた美人さん。

なかなかタイプだ。

「皆よろしく。」

で、集まって何を話してたんだ?」

「レベルアップ幻想御手についてよ」

「おお、噂のアレか」

最近よく聞くな。

インターネットの掲示板なんかでもよく見る話題だ。なんでも、簡単に能力をアップできる代物だそうで。

「そ。で、あんたは何してたの？」

「ダチと待ち合わせだ」

「ふう〜ん…（もしかしてあいつ！？よし！）
ならここに呼べば？」

「ああ、そうだな。メールしとくか」

「じゃ、それまでコッチの話ね」

そして、今回事起こっている事件について教えてもらい、その原因が幻想御手である^{レベルアップ}と結論に至り、情報を集めているが全く肝心な情報は掴めていない…というのが現状。

「なるほどねえ…、これと言って成果は無しで行き詰っている状態か」

「そうなのですよ、緋延さんは何かご存知ありませんこと？」

「悪い、俺はそういうのには大して興味を惹かれないんでな…何も知らん」

「そうですの…」

「あの…」

恐る恐る手を上げる佐天。

「ん？なんだ？」

「疑問なんだけど、何故学園都市にいるの？
カリキュラム授業も受けないで何をしてるのかなあ」と……」

そう、ココ学園都市にいるという事はやはり授業を受け、
カリキュラム能力を発現しに来たと考えるのが普通である。
だがしかし緋延は能力開発もろくに受けず、
カリキュラム授業も受けていない。
そこに疑問を持つのは当然である。

「その疑問はもつともだ。」

ん……極端に、簡単に言えばとある人物達の護衛だ」

「能力者でもないのに!？」

その発言に、緋延の眉がピクリと動く。

「その偏見はやめたほうがいいぜ。」

学園都市の外には知らないだけで能力者と対等以上に渡り合える者
もいる」

「……信じられませんわ」

「……まあ口で言っても信じないだろう。
それなりの広さがあるとはいえ、世界に比べれば学園都市は遙かに
狭い。」

確かにココの能力者は世界規模で見てもトップレベルだろう、が、

俺の言う対等以上に渡り合える者達も強い。

別にひいきしている訳じゃない、その実力は確かなモノだ。

故に、自分の定規でそう簡単に測らない方がいいぜ？

世界はいとも簡単にソレを覆すぞ。

まあ…何より、ココの能力者には圧倒的に足りないモノがあるからな…」

「…なに…？」

美琴が少し小声になりながら聞く。

周りの者も冷や汗が背中を流れ、思わず息を呑む。

そして緋延は喋りだす。

「ココ学園都市でも割と日常的に戦いがある。しかしその多くは『制する』ための戦い。

ココの能力者に圧倒的に足りないのは『生か死か』の極限の戦いの経験。

それも格下の相手では無く、圧倒的な数が自分と同等またはそれ以上の相手との文字通り死闘。

誤った判断、僅かなミスが死に直結し、一発で針の穴に糸を通すが如く勝機を見つける。

そういう経験が圧倒的に足りない。」

「…で、でもいくらなんでも大げさじゃあ…」

「甘いぞ」

初春が苦笑い気味に言うが、すぐさま緋延は言う。

「ココ学園都市は世界規模で見れば喉から手を出しても欲しい未知、未来技術の塊、言い換えれば夢の都市だ。

特にリスク無しでほぼ誰でも簡単に能力者になれる装置。数十年は進んだ科学技術。

他と比べ物にならない位の戦闘兵器。

それを上回り、一人で国の軍隊を相手取る事ができるレベル5の存在。

これだけのモノがあるんだ。狙われないなんてことは無い。

まあ…まだ色々ありそうなんだがな…（ボソッ）」

その話を聞き、木山春美も含め全員が黙って下を向き考え…いや、何も言えなくなってしまった。

だが緋延は言う。

「かといって今すぐソレが起きるとは限らない。

そうそう容易な事じゃないからな。

だがいつか必ず起こるだろう。

警戒位はしといた方がいいんじゃないかな。

…はい、終わり!!!

話が反れちまったな、すまん」

「い、いえ…勉強になりましたですの」

全員がなんとも言えない表情で目をキョロキョロ動かし、

漂う空気も非常に微妙なモノになってしまった。

緋延は若干後悔した。

この話はなんとなくくしてしまったが、やっぱりしなきゃよかった。と思った。

この微妙な空気をなんとかしなければ。
そこで思いついたのが…

「そうだな、気分を悪くさせちまったから「」は奢るよ」

「「「「え!?!?!」」」」

「…いいのか?」

よし、木山さんも含め目の色を変えて全員喰い付いた。

さっきまでの空気が嘘のようだ。

「かまわんぜ。大方飲み物しか頼んでないみたいだしな」

「いや、そういうことなら…」

そう言い、全員がメニューを見始めた。

不味い…、決まる前に釘を打つとくか。

「デザート位ならいいが食い物はダメな」

そう言いつつ、

「そ、それくらいわかってるわよ!」

「そ、そうですの」

「う、う、う」

「あ、あはは」

「…わかっているぞ」

美琴、黒子、初春、佐天、木山という順番でつつかえながら言う。

こいつら…。

「ま、そういうわけだ」「んじゃア、俺もお願いするかな」「…」

「!?!」

見れば、眠たそうに欠伸をしている目つきの悪いひよろい白髪の男が立っていた。

美琴以外は誰だろう?という目で見ている。

タイミング良く来たな、一方よ。

メールじゃお前は少し遅れるんじゃないのか?

美琴は何故そんな驚いている?

「君の待ち人か?」

「ああ、紹介は…」

「ああ?…自分でやる」

木山が緋延に尋ねる。

緋延は紹介を、と言うが止められる。

そして口を開く。

「ココ学園都市で一位をやっている一方通行だ、よろしく」

と、まあダルそうに自己紹介と挨拶。

あまりにもアツサリと言ったので全員が口を開けポカーンとしている。

数秒遅れて、

「「「「「ええー!!!?」「」「」」

「ウっせ」

同意見だ、友よ。

4 二十日 出会い ー (後書き)

まだ二十日は続きます。

i n d e xとの邂逅はもう少し。

感想も待っています。

ではまた次回。

5 二十日 出会い 二(前書き)

遅れた理由は『零の軌跡』をやっていたからだ。

その代わり一週目はなんとか終わったぜ。

では、ごんご。

5 二十日 出会い 二

一方通行が現れてから数分。

現在、一方通行は少し離れたカウンターで昼飯を食べている。

離れている、とは言っても目と鼻の先だが。

木山が緋延に話しかける。

「以外だったな…まさか一方通行が君の待ち人だったなんて。一体どういふ関係なんだい？」

美琴達も気になっているのか、目を向けてくる。

何て応えるのか気になってしかたないのだ。

そんな中、緋延は当たり前のように言った。

「友達だ」

「……え？」「……」

その答えに、全員の声が重なる。

「お前らが何を思っているのかは知らんが、アイツは俺の友達だ」

「え…でも、聞いた話じゃ誰も寄せ付けないって…」

と、涙子。

「それは襲い掛かってくる奴らを返り討ちにしていたからだ。

それを怖がって誰も近づかなかったからそついう噂が広まったんだ

「よ

「ああ…そうなんだ…」

あの目つきだもんね…納得、と続けて呟いた。

「まあそんなわけだ、食い終わったみたいだから俺はおいとまするぜ。

奢ると言った手前、払っていくからこれ以上は自分達で払えよ、またな」

伝票を取り一方のところまで行き、少し話してから共に店から出て行ってしまった。

「行っちゃった…」

「…そうですわね」

「うん…」

「…我々も出るか」

「…そうしましょうか」

佐天、黒子、美琴、木山、初春と続けて言う。

時間を見ればオヤツの時間をかなり過ぎていた。

お金は払ってあったので、そのまま解散という形になった。

.....

時刻は既に夜。

機械獣に勝るとも劣らない気迫で迫る主婦もどきの学生達とセールという名の戦争を終え、

緋延と一方はマンションに向かっていた。

本日の目当ては8個パックのタマゴ98円お一人様一個100名限定！！である。

緋延はその長い髪の毛を引っ張られながらも背の高さを生かしゲツツ。

一方は殆どの反射を切り、自身の走力だけで危ないながらもどうにかゲツツ。

そこから本日の夕飯の材料を買い、今に至る。

余談だが、ココでの一方通行は原作よりも体格は良い。

緋延に出会ってから、少々武術も習っている。

元々の線の細さからか、あまり変わっていないように見えるがきちんと筋肉はついている。

マンションに着き、あとは部屋まで行くだけというところで緋延の鼻がその匂いを捉えた。

「...血の匂いだ」と

「あん？」

「上の方から血の匂いがする」

「...先行ってるぜ」

そう言い、荷物を緋延に預け一気に跳躍していった。
緋延も走り出し、買い物袋を置きに自分の部屋まで跳躍した。

.....

一足先に到着し周囲を見ると、見慣れた友の姿が目に入った。

「当麻!？」

「一方か!ちょうど良かった、この子を病院まで運んでくれ!」

「なに?」

見れば、白い修道服を着た銀髪の子供が血を滲ませ、うつぶせに倒れていた。

「…なにがあったア」

「いや、帰ってきたら…」ココに倒れていたんだよ」

「…」

その表情から僅かな同様が見て取れる。

この状況なら当たり前か。

と思う一方。

近づき、傷の様子を見る。

斬り傷：それも刀剣の類に斬られたような傷。

風使い《エアロシューター》の放ったカマイタチの類か？
だが、それにしても傷が微妙な深さだ。

殺す気で放ったのだとしたらコレでは足りない。

単にレベル：演算の低さか？それともわざと手加減した？
それとも別の能力者？

まあ、今そんな事を考えるよりは連れて行くのが優先だな。

「誰がやったか知らねエが、とりあえず血は止めておく」

傷口に手を添え、反射による傷口からの出血を抑える。

それを見て、ホツとした当麻が口を開く。

「一方がいてくれて助かったよ、なら全は急げだ。早く病院に行こ
う」

「言われなくてもわかってる」

少し焦る口調で言う当麻に若干イラつく口調で返す一方。

「にしても一体誰がこんな…」

その先の言葉を言おうとした時、居ない筈の第三者の聲が被った。

「うん？僕達魔術師だけど？」

「「！」「」」

後ろからの声に振り返る二人。

そこに居たのは、黒いマントに緋延と同じ位の背、赤い髪にピアスにタバコといった、いかにも怪しい男が立っていた。

「魔術師イ？なアにを寝ぼけたことを言っただがる」

魔術師、という単語に反応したのは一方である。

当麻はその横で何かに気づいた：いや、思い出した表情をし、冷や汗を垂らしながら見ている。

その表情を見た一方は当麻が何か隠していると確信した。

「まあ知らないのも無理はないさ、魔術は秘匿されるべきモノだからね」

「ほう、秘匿されるべきモノなのにそんなペラペラ喋っちゃまっていいのかい？」

「安心していいよ、君達はもうすぐ何も」喋れなく」なるのだから」

その言葉に一方の眉がピクツと動く。

「それにしても…神裂のヤツも派手にやったもんだね…

ま、死にかけだろうと何だろうと回収するけどね。

”ソレ”の持っている一万三千冊の魔道書は」

その言葉を聞き、当麻は怒りに震え、一方は怒りと共に一つの疑問が浮かんだ。

”持っている”？このちっこいヤツが一万三千冊も？

荷物などは見当たらない。そもそも一万三千冊なんて量はトラック数十台くらいないと運べない。

ということは何処かに隠してある？

どこに？

そう考えている内に当麻が立ち上がり、自称魔術師を怒鳴りつける。

「魔術師だかなんだか知らねえが…こんな小さい女の子によってたかって…ツてめえら！！」

大体こいつがどこに魔道書なんて持っているんだよ！！！！」

一方は黙って聞いていた。

先ほどの疑問はすでに頭の中では大方整理がついていた。

そしてあえて何も言わず聞いている、その先にある答えが己の推測とあっているかどうかを。

「『完全記憶能力』って知っているかい？」

ビンゴ。

一方の頭の中でそう呟いた。

ステイルは続けて言う。

「あるさ、魔道書は禁書目録の頭の中に」

やはりか。

そう一方は思った。

あらゆる可能性を考慮した結果、この答えに辿りついた。

しかし、自信はそこまで無かった。

それが今、確信に変わった。

さらにステイルは続ける。

「君になんかには意味がわからないだろうけどね、
そいつはね、”使える連中”の手に渡ると少々やつかない代物なん
だ。」

だからこうして僕達が保護してやりに来た と」

「ほ…」

当麻は呆気にとられていて言葉が続かない。

一方は保護という言葉に赤ロンゲが使った瞬間吐き気をもよおした。

「そうさ、保護だよ。」

ソレにいくら良識や良心があつたとしても拷問や薬物には耐えられ
ないだろうしね、

そんな連中に女の子の体を預けるなんて考えたら心が痛むだろう？」

「て…めえ…!!」

当麻は吹き出した怒りを露にする。

一方も沸々と湧き上がる怒りを冷静さで抑えながら言う。

「こんな若い少女を”ソレ”呼ばわりする連中に言われたくはねエ
な」

と言いたかったがキレた当麻が突っ込んだことにより言えなかった。

「何様だッ!!」

「バツ!!」

怒りで冷静さを欠いている。

未知の相手に考えも無しに突っ込むヤツがいるかッ!!

しかし、相手の魔術師は驚くほど冷静だ。

銜えているタバコを左手で取り、口を開いた。

「ステイル＝マグヌスと名乗りたいところだけど、

ここは”Fortis931”と言っておこうかな。

僕達魔術師は魔術を使う時に真名を名乗ってはいけないという因習があつてね…

魔法名……」

そう言い、吸いかけのタバコを外へ投げる。

そして、何かを呟いた。

炎よ《Kenaz》

すると投げ捨てたタバコの炎が数倍に膨れ上がり、

「殺し名、かな」

燃え上がった炎が魔術師、ステイルの左手に集まったのだ。

……巨人に苦痛の贈り物を《Purissaz Naupiz G
ebo》

集まった炎は炎剣となり、向かって来た当麻を襲う。

「うつ…わあ!？」

「当麻!！」

一方が叫ぶ傍ら、迫り来るその炎を見て、当麻は感じた。

(これが、”魔術”… 魔術の炎かッ!！)

そして、半分は賭けで、炎がぶつかる寸前、右手を前にかざした。

炎が当麻を飲み込んだ。

.....

魔術師ステイルが見る先、己の炎剣により上がった黒い煙があった。

「ふん、やりすぎたか？」

まあいい、夏休みとやらで住人は残っていないようだしね。

ご苦労様、残念だったね。真正面から向かって来た蛮勇は認めてあげよ

それを黙って聞いていた一方が黒煙の向こうから言う。

「なアに言っただがる?」

「何?」

「まだ終わってないぜ？魔術師さんよオ」

煙がポツという音と共に晴れる。

「ったく、そつだよ…何をビビッてやがんだ」

若干引きつった笑みを浮かべ、傷一つついてない当麻が立っていた。

「なん…だと…!?!」

驚くスタイルを無視し、当麻は言葉を続ける。

「インデックスの『歩く教会』をぶち壊したのだからこの右手じゃねーか！」

「!?!」

その言葉を聞き、スタイルに明らかな動揺が走る。

当麻は己の右手を確かめるように強く握り、叫んだ。

「炎だろつが何だろつが…しよせんただの『異能の力』だ!?!」

.....

その頃、緋延は…

「くそ、一方の野郎…

乱暴に放り投げやがって…タマゴが二つ潰れちまってたじゃねえか」

冷蔵庫にタマゴを詰めていた。

5 二十日 出会い 二(後書き)

アドバイス、感想等待着っています。

もう少しでGEBの発売日…DCPも出るんだよなあ…
こりゃ、財布が死ぬな。

では、また次回。

6 二十日 出会い 三(前書き)

G O D E A T E R B U R S T 面白いな。

ハンニバル見た目カッコイイし。
戦うと辛いが…。

どろぞろ。

6 二十日 出会い 三

一方はその様子を鋭い目つきで見て、思った。

やはり当麻の右手はこういう時にはかなり役に立つ。

能力を使ったモノを消す…いや、無くす？か？

反射より反則なんじゃねえのか？

と思うほどだ。

ステイルの作った炎剣は当麻の右手に砕かれ、

その勢いで当麻は殴りかかるがステイルは後方に大きく後退して避ける。

距離は数m、そしてそのまま両者共に動かず睨み合う。

ステイルは驚愕に震えていた。

法王級の守りを完膚無きまでに破壊した力…

まさか目の前にいるこの少年がそうだったとは。

自然と冷や汗が頬を伝う。

そして、ステイルは己の切り札を切る決断をした。

一方は思った。

相手からすれば当麻のあの右手は初見では何が起こっているのかはまず判らない。

相手が何かしら能力を使う者ならばどんなモノでも消せるのだから能力に頼りきっている者には天敵だ。

なんせ自分も”アレ”にやられたのだから。

逆を言えば大体の能力者には勝てるが能力者以外の奴らには勝てない。

現代兵器や刃物、武術や格闘術に対しては何の意味を成さない。

当麻は機転が利くから”負け”はしないだろうが決して勝てないだ

ろう。

そんなことを考え終える時、ステイルは何かを言い始めた。

世界構築する五大元素の一つ《MTWO TFF TO》

偉大なる始まりの炎よ《IIGO IOF》

言葉と共に、ステイルの周りから炎が上がり、

その名は炎その役は剣《IINF IIMS》

渦巻き、膨れ上がり、

顕現せよ《ICR》

我が身を喰らいて 力と為せ《MMR GP》

炎が人の形になった。

その手には、燃える十字架。

そしてステイルは言い放つ。

「殺れ、魔女狩りの王 《イノケンティウス》！！」

イノケンティウスが迫る。

しかし、当麻は恐れる事無く、歩を進めようとしたその時、突如スプリンクラーが作動し、両者思わず止まってしまった。

そして、ステイルの後ろから声が響く。

「そこまでだ、魔術師。これ以上はやめてもらおう」

その声を聞き、一方は安堵の溜息を吐く。

当麻も自然と表情が明るくなる。

ステイルは勢い良く後ろを向き、その声の主を視野に入れると言う。

「誰だ!!」

そこには、自分と同じくらい高い背、腰まで届く黒髪を揺らした男が一人。

「黒鋼緋延だ、憶えておくといい」

その言葉を最後に、ステイルの意識は飛んだ。

場所は移り、小萌先生宅。

男三人で押しかけたので微妙に勘違いされたがインデックスを見るや否や慌てて招き入れてくれた。

魔術による治療は能力者は邪魔になるだけだ、と言い、治療は小萌先生に任せ、邪魔にならないよう出て行く。

そして今は三人揃ってファミレスで待機中である。

緋延が口を開く。

「さて、知っている範囲で答えよう」

当麻と一方の考えている事は同じだろう。
まずは当麻が口を開く。

「彼女は、インデックスは何者なんだ？」

まずはこれから。

「彼女はイギリス清教内第零聖堂区『必要悪の教会』ネセサリウス所属の魔道書
図書館、

魔法名は…忘れた、正式名称Index-Librorum-Pr
ohibitorum《禁書目録》だ」

「な…!？」

「…えらい詳しいじゃねエか」

「ああ、一度会った…と言っても見かけた程度だがな」

「…」

若干信じられないという表情で緋延を見る二人。
一方の方が若干早く整理が着いたので質問する。

「魔術…ありゃマジモンか？」

「マジだ」

「…そオカ」

「実際見たんだ、嫌でも信じるしかないだろ？」

「あア…」

”アレ”は”ココ”の能力者じゃできない芸当だ。まあ、似たようなことはできるかもしれんが…。

「俺からも聞きたい。

当麻、何があつた？何を隠している」

「それ…は」

「俺としては喋ってほしいんだがな」

「巻き込まれた手前、俺も話してほしいぜ」

それから暫く黙ってはいたが、
当麻は今朝の出会いのことを話してくれた。

「そいつアまた、どこの漫画みたいな出会い方だなア」

「なるほどねえ、地獄の底まで…か」

一方の言うどこの漫画はさておき、
緋延は地獄と聞くとどうも奴のことを思い出してしょうがない。

「で、どうするんだい？上条さん？」

「…」

緋延は当麻に問う。

一方は腕を組み、目を瞑り只聞いている。

「俺…は、」

一旦言葉は止まるが、

「彼女を、地獄の底から引きずり出す」

確固たる決意を宿した目で、そう告げた。

「決まりだ、どうする？一方？」

「ハッ、わかったようなこと聞くんじゃないよ。

あん時は、当麻が戦ったが今度は俺にやらせてもらおう…

魔術師と戦うのも、最強への道だ」

「…わかった、けど…」

当麻の言葉に一方が被せる。

「無理はすんな、だろ？」

「ああ」

「一つ、いいか？」

緋延が人差し指を突き出しながら言う。

「あん？」

「魔術に対しても、反射は出来るだろうが…

いかんせん”アレ”は”ココ”の能力と根本が違う。

正常に反射できればいいが、ある程度違う演算もしいたほうがいい」

「魔術ってのはそんなに違うもんなのか？」

「ああ、簡単に言えば回路が違う」

「回路？」

「魔術は、能力の無い者が能力者と同等かそれ以上の力を得るために生み出された者だ。

『能力の無い者』の為の術式と儀式は『システム能力のある者』にはつかえない」

「…なるほど、

人工的（半強制的）に回路を開いているココの人間とは開き方も使い方も違っていることか」

ここで当麻が面白い質問をする。

「じゃあ、魔術師がココの時間割カリキュラムを受けると魔術が使えなくなるのか？」

「うーん…そればかりは前例が無いから何とも言えん…」

「ふうん」

一旦話はこれで終わり。

同時に全員の腹の虫が鳴る。

「…腹減ったなア」

「魔術師のせいだな」

「…何か食おうぜ？」

幸いにも今居るのはファミレスだ。

夕飯にしては少々遅いが…まあ仕方が無い。

夕飯を済ませ、陽が昇り始めた次の日の朝。

三人は再び小萌先生宅に向かった。

6 二十日 出会い 三(後書き)

GOD EATERの小説書こうかな…。
書きたいな…。

でもドレもまだ途中だしなあ…

感想、アドバイス等待着っています。

では、また次回。

6・5 二十三日 緋延とアレイスター（前書き）

癒しが欲しい。

ドリームクラブ的な。

ど〜ぞ。

6・5 二十三日 緋延とアレイスター

あれから二日。

インデックスはあと一日もあれば完璧に回復するようだ。

まあ、緋延はやることがあるのでインデックスは小萌先生宅で当麻に任せっきり。

一方は何処かへ散歩。

緋延はというと…

「さて、アレイスター。

俺の言いたい事は…分かるよな？」

「ああ、君が怒っているのは十分わかって反省しているから、その右腕の刃の回転を止めてもらえるかな？」

薄暗い部屋の中央に、生体ポッドらしき物に逆さに入っている人物。曰く、男にも女にも、子供にも老人にも、聖人にも囚人にも見える『人間』らしい。

アレイスターと緋延の出会いは何十年前。

血の中での出会いだった。

簡単に言えば命の恩人その一である。その二はカエル医者。

その時は意識が朦朧としていたが緋延の姿はハッキリと憶えている。

その後、目を覚まして目の前にあったカエル医者顔は今でも忘れない。

面と向かって会って話したのは学園都市が完成し、

この身が生体ポッドに入って暫くした後だった。

いきなり現れて、久しぶりと軽く言ったのだ。

頭の中にあつたぼんやりと憶えているイメージと全く一緒だった。

それと同時に疑問が浮かんだ。

変わってないのだ。

数十年の時が経っているのにもかかわらず。

何一つ変わっていなかったのだ。

人間、数十年も経てば老いるはずである。

それが無い。

その困惑の雰囲気を感じたのか、自己紹介をしてくれた。

その自己紹介で謎は解け、納得した。

その時、好奇心からか、興味からか、自分はどう見えるかと聞いてみた。

しかし、初めてこの姿のアレイスターを見た緋延から言われた一言は予想外だったらしい。

それは、

「俺から見れば、そこら辺にいる奴らと大して変わらん」

そんなことを言われるのは初めてだった。
思わずその時は笑ってしまった。それはそれは大いに。
ポッドの中でクルクル回ってしまったほどだ。

それはさておき、

「何故インデックスがココにいる？」

「正直、私も先ほど知ったばかりでね、
今回の事態は私でも全くわからなかったんだ、すまない」

「…まあいい、コッチはコッチでやらせてもらおう」

「と、言うこと？」

「どうもインデックスから妙な違和感を感じる」

その言葉を聞き、アレイスターは笑みを浮かべながら緋延に言う。

「…それはその体に少し残っている人としての直感かい？
それとも…魔神として感じる違和感かい？」

「…」

アレイスターのその発言の直後、
暗い部屋は更に暗くなったと感じ、空気は数倍重たくなった感じがした。

「…さあな」

「そうかい」

「ま、とりあえず話しは終わりだ。また何かあったら来る。
そっちも何かあったら呼べ」

「ああ、”その時”は頼らせてもらおうよ」

くるりと方向転換し、
緋延は歩き始めるが”ある事”が頭を過ぎったので歩を止め、背を
向けたままアレイスターに言う。

「絶対能力進化《レベル6シフト》…アレは解体されたはずだよな？」

「ああ、私の知る限りでは完璧に解体されたはずだ。…なぜそんな事を聞くんだい？」

「…ココへ来る途中シスターズを見かけたのはいい、問題は武器を携行していた事だ」

「…まだ実験はやっている、と？」

「ああ」

「…あの時の一方通行”だからこそあの実験だ、見間違いなんじゃないのかい？」

「…第二位、ダークマター未元物質垣根帝督はどうだ？」

「…考えられなくもないねえ、だが彼は…ねえ…」

「ん？なんだ？」

「いいや、なんでもないさ。気にしないでくれ。

それともう一つ可能性としては再び何者かが一方通行に対して実験を再開した…か」

「…」

『再開』の発言を聞き、思わず拳を握り締める緋延。
しかしそれも一瞬、再び歩き始め、

「…また来る」

「ああ、また」

待機していたテレポーターにより部屋から去っていった。

再び部屋は静寂に包まれる。

アレイスター・クロウリーはポッドの中で、何かを考えているようだった。

6・5 二十三日 緋延とアレイスター（後書き）

この時間帯は眠くて…

日差しも暖かいし…居眠りしちまいそうだ。

次回、おそらく戦闘。

7 二十四日 昼 再臨 一 (前書き)

いつもの昼間に更新できなかつたので今だ。

まあ、パソコン忘れたからなんだけど。

どぞ。

7 二十四日 昼 再臨 一

昼過ぎ。

一方は当麻とあの時の少女、インデックスの居る所へ。

当麻では対処しきれない魔術師がいるかもしれないので、護衛：

正確には魔術師と手っ取り早く殺りあうために二人と共に過ごす事にしたのだ。

部屋に着き、自己紹介をする。

あ後に会っているんじゃないかって？

あの時はインデックスは回復魔術で治療したばかりで、自己紹介なんてしている余裕なんてなかったからな。

ある程度体調、気力、体力共に戻ったらと決めていた。

ので、今なのだ。

緋延は居ないが後からでも問題無いだろう。

「インデックス、憶えているよな？

血をずっと止めていてくれた…」

「アクセラレータ一方通行だ、よろしくウ」

「勿論憶えてるよっ！

アクセラレータ一方通行って言うんだ…じゃあ、

アックーはあんまりだから…イッポーだね…！」

「ああ…好きなように呼べ」

てな感じで自己紹介をしている中、あとの一人、緋延はというと…

「で!?!」

携帯片手に、緋延はビルを足場に隣のビルへ大ジャンプ中である。
話相手は御坂美琴である。

なんでも、先日会った佐天涙子がレベルアップ幻想御手を使ったせいで倒れたらしく、

彼女を収容した病院の医者が解決の糸口を見つけ、犯人に辿り着けたらしい。

実を言うとその医者、冥土返し《ヘブンキャンセラー》の異名を持つ、

緋延の”正体”を知る数少ない古い友人の一人、カエル顔の医者からある程度連絡を受けていた。

「すまないね、けど被害者が一人を超えている。

これ以上被害者を出さないよう、彼女を止めてくれるかい」

無論、了承したがいかんせん場所がわからない。
ついでに言えば肝心の”彼女”の名前を聞くのを忘れた。
もう一回電話するのも難なので、
とりあえず高いところから街を眺めるか…とっていた矢先、美琴
から電話があつたのだ。

跳躍し、ここらで一番高いビルの上に降り立つ。

「だから、^{レベルアップ}幻想御手の大本、犯人がわかつたんだけど、
そいつが初春さんを人質にして逃走中なんだって！！」

「だから美琴も向かっているんだろ？」

「あんた強いんでしょ？だったら手を貸しなさいよ！！」

「ああ、だから今向かっているじゃないか」

「場所は……よ！！」

しかし、突然のノイズが走り肝心の場所が聞き取れない。

「なんだ！？聞こえないぞ！？」

「いm…ガアアアアン…戦t…木山h…ドンッ」

「クソつたれ…」

悪態を吐きながら通話を終了する。

途中で聞こえた爆発音、言葉の端を思い出す。

今 戦い 木山

の三つ。

恐らく、戦闘に突入したのだろう。

ということは相手はあの場に居た木山春生か。

しかし、彼女は科学者であって能力者ではなかったはず…

考えていても解決にはならないので、ビルから周りをグルリと見渡す。

すると、原子力発電所の近くの高速度道路付近から煙が上がっている。

事は一刻を争う。

故に、緋延は最速の移動方をとる。

「見つけ。

よし来いッ、スクランダーッ!!」

遙か後方、空間が横に裂ける。

轟音と共に、そこから音速を軽く超える速度で飛び出したのは、紅の翼。

そう、数十年前の『炎の三日間』で世界を救った魔神の翼。

スクランダーは一瞬で緋延の立っているビルに到達し、速度を落とすこと無く緋延はスクランダーの背に乗る。

そして、美琴が戦っているであろう場所へと飛ぶ。

- - - - -

只今戦闘中。

デュアルスキル
多重能力者…じゃなかった、
マルチスキル
多才能力者だったわね。

能力を状況に応じて使い分けてくる…やっかいね。

そこんとは多重でも多才でも変わらないと思っけど…

電撃は誘導されるし、物を投げてもダメ…

オマケにこっちは落とされて恰好の的…いつ攻撃が来てもおかしくない。

しかし、背中から落っこちて咳き込んでいる美琴に攻撃は来ず、

木山は話しかける。

「もう止めにしないか？」

木山がそんな事を言い出した。

さらに木山は続ける。

「私はある事柄について調べただけなんだ、それが終われば全員解放する。」

誰も犠牲にはしない…」

犠牲にしないという言葉が出た瞬間、美琴の音が響く。

「ふざけんじやないわよ！！誰も犠牲にはしない？
あんたの身勝手な目的にアレだけの人間を巻き込んでおいて、
人の心を弄んで…こんな事をしないと成り立たないロクなもんじや
ない！！」
そんなモノ見過ごせるわけないでしょうが！！！」

美琴は叫ぶ。

しかし、木山は溜息をつく。

「ヤレヤレ、超能力者《レベル5》とはいえ所詮は世間知らずのお嬢様か」

「あなたにだけは言われたなかつた台詞だわ…」

思い出すのは病院とファミレスでの人前での堂々のキャストオフ。

「学園都市で君達が日常的に受けている『能力開発』、
アレが安全で人道的なモノだと君は思っているのか？」

「!？」

「学園都市は『能力』に関する重大的な何かを我々から隠している。

学園都市の教師達はそれを知らずに百八十万にも及ぶ学生達の脳を日々『開発』しているんだ。
それがどんなに危険な事かわかるだろう?」

それを聞き、美琴は冷や汗を流す。
しかし…

「なかなか面白そうな話じゃない…」

話の間に十分集まった。
地面に当たっている右手を中心にソレは渦巻く。

「それはあんたを捕まえた後でゆっくりと……調べさせてもらうわ!」

御坂は木山に向かって砂鉄剣を射出する。
だが木山は瞬時に地面から壁を作りソレを容易く防ぐ。

「調べる…か。それもいいだろう…
君がかかわっているのも少なくともはないしな（ボソッ）」

最後の言葉は小さすぎて美琴には聞こえなかった。

だがそんなものは特に気にせず、美琴は次の攻撃手段を考えていた。

砂鉄剣も駄目か…

こつちの切り札の超電磁砲レベルガンは駄目だ、まだ早すぎる。

アレがもし防がれれば打つ手が無くなる。

そもそも（アイツ以外）人に向けて撃つなんて…

そこで、今ココへ向かっているだろう緋延の言葉を思い出す。

極限の経験が足りない。

こういう状況の事を言うんだらうか…

いや、恐らく違っただらう。

向こうは本気の”ほ”の字も出していない。

むしろ手加減されている。

途端に、怒りがこみ上げてきた。

相手にではない、自分に対してだ。

超能力者《レベル5》が聞いて呆れる。

自分の能力がこうも効かないだけで半ば諦めかけていたのだ。
そんな自分に腹が立った。

クソツたれ。

僅かな時間でそう思考を巡らせていると木山は言う。

「だがそれもここから無事帰れたらの話だ」

美琴が会話の間も色々考えていると、木山は空き缶を投げる。投げられた空き缶は放物線を綺麗に描きながら美琴に迫る。

一瞬何かな？

と思ったが先日の事件が頭を過ぎる。

アルミ缶は爆発する。

しかし、美琴は磁力で周囲の砂鉄や鋼鉄を組み上げることですれを防いだ。
グラビトン
重力子である。

「知っている能力で助かったわ」

「ならば」

間髪入れずに、木山は次の行動をとる。
近くを転がっている空き缶入れからアルミ缶のみを空中に出す。
数はザツと五十。

「まさかそれ全部!？」

「そんな即席の盾で防げるかな？」

一瞬、どう防ごうか？

と考えたがそれは自分の性に合わない。
やることは只一つ。

「ハッ、だったら爆発前に全て吹っ飛ばせばいいだけでしょうがッ
!！」

美琴は自身の周りに電気を走らせる。
それを放とうとした瞬間、一瞬の内に影が通り過ぎる。

「「!?!?」」

お互い攻撃態勢になっていたがその通り過ぎた影のせいではまってしまっ。

何!?!?

なんなの!?!?

そして

黄色い閃光が空から降り注ぎ、

「キャッ!?!?」

「うっ!?!?」

缶を全て消しさった。

見れば缶を消しさつたにもかかわらず、
勢いは殺されず地面に線引きをしたみたいに横一直線に地面が無く
なっていた。

さらに、

ダン！！

と、空から美琴を庇つように

「あ…」

「二人とも、そこまでにしとけ」

緋延は降り立った。

.....

「よう、美琴」

美琴は目をパチクリさせている。
しかし、ハッと我に返り質問する。

「あ、あんた能力者じゃない!!」

「ん？違う、俺は能力者じゃないぞ」

「じゃあさっきの攻撃は何よ!？」

「ああ、あれはな……」

「君は……」

説明しようと思ったが木山の声で遮られる。

「や、木山さん」

「…何をしに来たんだ」

「あなたを止めに」

特に考える素振りを見せずにそう言う。

「私を？」

ああ、先ほど彼女が電話していた相手は君か。助っ人というところか。

しかしどうする気だ？

常盤台の超能力者《レベル5》、超電磁砲レールガンが手も足も出ないのだから？

その言葉に美琴はムツとするが事実なので反論もできない。
聞かれた緋延は口を開く。

「問題無い、多重だろうが多才だろうが…神だろうが悪魔だろうが、俺に傷一つ付けることはできない」

あまりにも、当たり前前の様にこう入った。
美琴は開いた口が塞がらず、木山は驚きを通り越して呆れている。

「…凄まじい自信だな」

「事実だからな」

「あ…あ…」

「ん？」

美琴の様子がおかしい、振り向いてみると…

「あんた馬鹿じゃないのオオオオオオ！？」

思いつきり叫ばれた。

「五月蠅いな…」

「何！？神とか悪魔って！！あんたそついつヤツなの！？」

馬鹿を通り越しているじゃない!！」

「だから五月蠅いって。いいから、後は任しときな」

美琴の頭に手をポンッと置き、離れるように言う。

「…大丈夫なんでしょうね？」

「ああ、離れてな」

「…わかったわ」

言われたとおり、距離を置く。

「待たせたかな？」

「いいや、気にする必要は無いわ」

「そうか…」

さて、できるだけ木山さんを傷つけないんでね、卑怯に思われるかもしれないが本来の姿にならせてもらおう」

「本来の…姿？」

「？」

木山、美琴共に訳が分からないといった表情だ。

無理もない。

これより現れるのは

人知を超えた存在

魔の神

神を屠り

悪魔をも無きモノとする

魔神なのだから

緋延は、叫ぶ。

マジンに選ばれし者にだけ許された言葉。

『マジイイイインッ！ゴウッ！！』

その叫びと共に、

緋延の顔には赤く光る紋様が現れ、

周囲は紅蓮の炎が上がり、

その炎の中から緋延と同サイズ位の、炎の鳥の様なモノが天高く上

がる。

「なにッ!？」

「炎…!？」

二人はその膨大な熱に思わず距離をとるが、大して変わらない。しかし、その凄まじい熱の炎の中にいる緋延はケロツとしている。上を見ながら。

美琴はつられて上を見る。

「!?!」

なんと、先ほど飛び出した炎の鳥のようなモノが高速で急降下してきているではないか。

あのままではぶつかる…。

急いで緋延に視線を戻すと…

緋延は、笑っていた。

緋延は、更に叫ぶ。

己が、魔神となる言葉を。

『パイルダアアアアアッ！！オオオオオンッ！！！！』

叫びと共に、炎のカイザーパイルダーは緋延と激突する。

同時に天に紅蓮の柱が昇る。

その天を貫かんとする勢いで昇る紅蓮の柱。

その光景に、木山と美琴は美しさを感じた。

だが、

其れも束の間。

紅蓮の柱は収束し始める。

僅かに上を眺めていた二人は思い出したように緋延の居た場所を見る。

収束は終わり、先ほどの熱は嘘のように無い。

二人は、言葉を失った

彼の居た場所を見て

彼の姿を見て

そこには先ほどまでの彼の姿は無く

そこにいたのは、
数十年前の惨劇『炎の三日間』で世界を救い、
その後、忽然と姿を消した人類の守護神。

魔神皇帝

マジンカイザー

7 二十四日 昼 再臨 一（後書き）

あ、友人からの質問でハーレムとかにはしないの？
と聞かれたので答えます。

するつもりはありません。

もしかしたら恋はしないかも…。

アドバイス、感想等待着っています。

ではまた次回。

8 二十四日 昼 再臨 二(前書き)

なんか昨日の夜あたりから急激に寒くなった気がする。

風邪にはお気をつけを。

どぞ。

8 二十四日 昼 再臨 二

「な…!？」

「うそ…」

木山、美琴の二人は驚愕していた。
あのマジンカイザーが目の前にいるのだ。

「たまげたる？」

そんなこと軽く言つもんだから開いた口が塞がらない。
頭を整理し、多少冷静になった木山はある疑問を抱く。

「驚いたな、まさかマジンカイザーの姿をとるとは。
メタモルフォーゼ肉体変化の類かな？」

「？」

木山さん言つただろ、元の姿に戻る…と」

「おかしいな、私の知るマジンカイザーは確か45mはあるはずだが」

『ああ、そつだな』

「…君は自身の能力で姿形を似せているだけにすぎんのだろうか？」

木山には確信めいたモノがあった。

この目で実物を見たわけではないが、写真や資料では見たことはある。

周りの建物と比べてもその大きさは巨大であることが分かる。

だが目の前の彼はとうだ？

人間と比べれば確かに大きい、2m強くらいか？

だが、写真の大きさと比べるまでもない。

明らかに偽者だ。

そこで立てた仮説が肉体変化系の能力者。

その仮説には絶対の自信があった。

しかし、マジンカイザーとなった緋延の言葉でそれは早くも崩れる。

『こんなところで元の大きさになったら二人が潰れるだろう。』

このサイズでないと』

「嘘はいいんだよ」

『あ、信じてねえな。』

『…しょうがない、後悔するなよ』

言い終わると同時に、再びマジンカイザーの周囲に炎が上がる。さらに、紅蓮の柱も再び天に昇る。

そして、その紅蓮の柱は更にに大きさを増していく。

「ちよ、ちよっと!?!」

「クツ!!--」

炎は離れている美琴の所まで広がり、紅蓮の柱はさらに巨大になる。

そして、遙か上で黄色に輝く目が光った。

同時に、炎の紅蓮の柱は一瞬で消え、

「…私はどうやらとんでもないモノを相手にしていたみたいだな」

「じよ、冗談でしょ…」

二人は”見上げた”。
その巨躯を。

『で、信じてくれたかい？』

彼は二人を”見下げ”ながら、言った。
大きくなった分、声も普通に大きい。
普通に喋っているつもりなのに。

「ああ…、わかった。
君はどうやら本物みたいだ、体の震えが止まらない。
降参するよ」

「え!？」

『…随分とアツサリ終わっちまったな』

多少戦うかと思っていたが、
戦意が無いと感じ、マシンカイザーは腕を組む。

「なに、私も君のファンでね。ある程度の知識ならある。
一万の脳を統べ、多才能力者マルチスキルとなっても君を傷つけられるモノは一つも無い。」

『木山さんみたいな美人にファンと言ってもらえると嬉しいねえ。
さて、サイズを小さくするか。この大きさは何かと目立つんでな』

再び紅蓮の柱が天に昇る。

略。

- - - - -

『さて、木山さん。何があった』

「私は教師を一時期していたことがあるんだ」

ズキッ…

ポツリ、ポツリと口から出てきたのは過去。

ズキッ　ズキッ…

AIM拡散力場制御実験　と銘を打っていたものの、その正体は　暴走能力の法則解析用誘爆実験　であり、その実験で使い捨てのモルモットとなってしまうのが自身が担当していた子供達だったのだという。途中、子供達との思い出も話してくれた。

ズキッ　ズキッ　ズキッ…

自分の責任で傷つけてしまった子供達の回復手段を探るために、『樹形図の設計者』の使用申請を23回に渡り申し込むが全て却下されてしまう。

代替の演算装置を得るために 幻想御手 を作成したのだという。

ズキズキズキズキ…

美琴は信じられないという表情で聞いていた。
そして、覇気の無い声で言う。

「なんで…：…それこそ警備員アンチスキルに…！」

「フッ…」

統括理事会がグルなんだ…警備員アンチスキルが動くわけがない」

「でもそれじゃ、アンタのやっている事も同じになっちゃ…！」

「君になにがわかるっ…！」

ズキンズ

「あんな悲劇は二度と繰り返させはしない！！
そのためなら私はなんだってする、
この街の全てを敵に回しても止まるわけにはいかないんだっ！！！！」

ズ
グ
ン
ッ
…

何かが、起きた。

「ぎ
ッ…！！？」

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

突如、木山は頭を抱えて苦しみだした。

「ちょ、ちよつと…」

『待て、何かおかしい』

美琴は近づこうとするがマジンカイザーによって静止させられる。

「がっ！？ゲ？

ネットワークの…暴走!？」

いやっ…これ、はAIM《虚数学区》の………」

そう言い残し、木山はその場に倒れてしまう。

ビキ

そして、何かがヒビ割れる音と共に、

ゾルン

ベチヨ

木山春生の頭から”何か”が出てきた。
姿は時々、一昔前の電波状態の悪いテレビのようじにブレる。
それがフワリと浮いた。

「…は？」

『胎児？』

その姿は胎児にそっくりだった。

美琴は訳が分からなかった。

と言うよりは、今日は色々と起こりすぎだ。

木山春生が犯人だと思って戦いを挑んだら多^{マルチスキル}才能者で、

先日知り合ったばかりだった黒鋼緋延があ^{マシンカイザー}の魔神皇帝で、
拳句の果てには”コレ”である。

パチツつとその胎児のようなモノの目が開く。

「キイイイイイイヤアアアアア！！！！」

ソレは、

産声とも

喚きとも

叫びとも

雄たけびとも

泣き声ともとれる

声をあげる。

アレは危険だと判断し、マジンカイザーは即座に行動に移す。

『美琴、木山さんを連れて逃げるんだ』

「あんたは!?!」

スツと指差し、

『アレを止める』

「大丈夫なの？あんな訳の分からないモン」

『問題無い、あーゆうのが専門だ』

「そうなの？」

『そうなの』

STM Cとかな。

「…わかったわ、けど後でキッチリ話してもらつからね！」

『…あいよ』

美琴は急いで瓦礫を木山ごと浮かし回収、階段で上まで上っていった。

それを確認し…

『さて、どうしたもんか…』

ま、様子見て………光子カビイイイム！！』

叫びと共に、目から黄色い閃光が稲妻のように走る。ソレを喰らったA I Mバーストの体を消し去った。

「ギエエエエエツ!?」

頭だけとなっても叫ぶA I Mバースト。

「ん? 案外脆い...?」

バリアの類が張ってあると思ったが見当違いだったようだ。

しかし、バリアは張っていない代わりに代わりに超速の再生能力を有していた。

消え去った体は瞬時に元通りの治り、マジンカイザーに攻撃してきた。

そこらじゅうに散らばっている瓦礫や周囲の水を圧縮したモノを飛来させてきたのだ。

しかし、マジンカイザーに当たりはしたものの、

砕けたのは瓦礫や鉄骨でマジンカイザーは傷一つついていない。

『多才能力に加え超速再生、か…』

拳を再度握り締め、言った。

『…ちよろいな』

- - - - -

アンチスキル
警備員、連絡装甲車内。

緋延ことマジンカイザーがAEMバーストとドンパチしている頃、
こちらでは”ある作業”が完了間近だった。

「これで、大丈夫な筈ですっ」

「ねえ、大丈夫なの」

「ああ…これで全員元通りになる」

初春が作業を終了し、美琴が聞き、目を覚ました木山が答える。

「後は、彼が片付けてくれるだろう」

「…心配だから見に行ってくる」

と、美琴は走り出そうとしたが木山に腕を掴まれ、止められる。

「行かないほうがいい、最悪の場合溶けるぞ？」

「え？溶ける？」

何を言っているんだ？
という顔だ。

「ああ、私も資料でしか見たことが無いが、数十年前の『炎の三日間』、

その最終日の戦いの時に出した技の中に『ファイヤーブラスター』
というものがある」

「ファイヤーブラスター？」

確かにマジンカイザーは数十年経った今現在でも有名である。

しかし、知っていると言っても外見と世界を巨大な悪から救ったという程度で、

その時に使った技や細かいモノまでは知らないのである。

特に今の若い世代には。

「胸部に赤いところがあつたらう？」

あそこから超高熱を放射するというモノなのだが…」

「？なによ？」

「…当時の資料には太陽より高温だったと表記されているんだ」

「…ウン」

「太陽も場所によって温度が違うのは知っていると思うが…」

その温度は中心部、1500万度を超えていたと書いてあるんだ」

「な…何かの間違いじゃないの？」

「その可能性はないだろう、数十年前とはいえ当時の最高峰の科学者が集まってデータを取ったんだ。

それを知っていたから、私は降参したんだがね」

「…そうね、1500万度の超高熱を放射してもソレに余裕で耐えられるほどの装甲に、

傷がつくとは思えないもんね…」

「…そういうことだ」

そんなこんなで、待つのみとなった一行。

初春は何の話だかよくは判っていない。

- - - - -

『フンッ！』

胎児として現れたAIMバーストは大きさをじよじよに増し、今は5mはあるう触手が生える豆と化している。

その触手がカイザーの腕に巻きつき、それを引きちぎった。しかし、すぐに再生するだろう。

『ここらだったらいいか…？』

一番手っ取り早い倒し方は超速再生すら追いつけないほどのデカイ一撃。

早い話ファイヤーブラスターである。

他の方法としては、仲間複数による絶え間ない連続連携攻撃であるが…

肝心の仲間が一人もいない。ので却下。

しかし、緋延が”なる”マジンカイザーの最低出力でさえ、放てば超合金Zを容易く溶解させてしまうほどの威力になってしまう。

そうなってしまうと、放つ場所は限られてしまう。

そう、丁度今いるような人気の無い場所とかである。

『ん？』

再生…しない？』

「ここらでいいかな？と考えている時、カイザーはある事に気づく。先ほどまでは傷つけばズフィールド並みの超速再生をしていたのに、今はしていない。」

原因は分からないが好機である。

『なんだか知らねえが、好都合！
こいつで終わりにしてやるぜ！！』

足裏のバーニアを使い一気に距離を詰めようとするが、
そう易々と近づけさせまいとAIMバーストも氷の槍を複数射出す
る。

だが、氷の槍如きでカイザーを傷つけることはできず、簡単に碎か
れる。

次の攻撃に移ろうとした時には既にカイザーは肉迫していた。

『又ウンッ!!』

高速で体を掴み、凄まじい速度で空に放り投げる。

同時にカイザーの目が輝き、胸に赤い雷が走る。

『くらいやがれッ、ファイヤアアアブラスタアアアアッ!
!!!』

全てを焼き尽くす魔神の炎を、空中に投げ出されたAIMバーストに向けて放ったのだ。

「ッッッ!?!」

特に断末魔の叫びを上げる暇も無く、AIMバーストは塵すら焼き尽くされ、消えた。

空でのAIMバーストの消滅を確認し、ゆっくりと視線を地上へと戻すと、

無言のまま、マジンカイザーは紅蓮の炎に包まれ、黒鋼緋延へとその姿を戻した。

- - - - -

場面は木山春生が警備員アンチスキルに逮捕され、連行される時に移る。緋延が口を開く。

「どつする気だ？」

木山は答える。

「…あの子達を諦めたわけじゃない。もう一度最初からやり直すぞ。どこだろうと私の頭脳はここにあるのだから…」

どこか、スッキリとした表情で言う。
ただし、と最後に付け加える。

「今後も手段を選ぶつもりはないぞ？
気に入らなければ、そのときはまた邪魔しに来たまえ」

「あんたねえ……」

と御坂は呆れていた。

スツと緋延は木山に近づき、他の者には聞こえない音量で話しかける。

「…後でアイツには文句（という名の罰）を言っておいてやる。
だから早めに出てこられるだろう」

「！ 君は…上とも繋がっているのか!？」

「上も上、一番上とね。」

「ただと統括理事会はとりあえず後で全員殺つとくから安心しな」

「…そう、か…
君ともっと早く知り合っていたら、あんなことにはならずに済んだのかな…」

「どうかな、例え会っても木山さんは話してくれなそうだし…」

「そうかもな…、しかしどうやって?」

「長生きしていると自然と知り合いは増えるもんだ」

「そうだったな…忘れていたよ。
もしかしたら私より上かい?」

「そうだな…恐らくこの地球上の誰よりも年をとっているんじゃないかな」

「フフ、その容姿でか…女性の敵だな。
…つくづく規格外だよ、君は」

そんな会話をし終わると同時に警備員アシチスキルの催促の声が聞こえた。

「お別れみたいだな」

「…ああ、さよならだ。」

感謝するよ」

「ああ、またな」

”またな”の声に木山はビクツと体を震わせる。
そして小さな声で、”ああ。”と呟いた。

そして木山を警備員アンチスキルに引き渡してこの事件は解決した。

そして交代するように白井黒子がタクシーでやってきて、

「おねえさまあああああああああああああ！！」

と、ものすごい声を上げながら御坂に抱きつき、
御坂にイタズラをするも電撃でいつものようにいなされる。

同時に病院から連絡がきたようで、
幻想御手の使用者全員が意識を取り戻したみたいだ。

それを聞き、初春はすぐに佐天が入っている病院へ向かう。

とりあえず、昼の部はこれにて終了。

美琴には悪いがこの後に話すのが面倒なので、

こっそりと

着実に

確実に

バレないように

怪しまれないように

素早く

俺は帰る事にした。

8 二十四日 昼 再臨 二（後書き）

微妙……………か？

アドバイス、感想等お待ちしております。

次回、夜の部。剣（魔神）対刀（聖人）。

8・2 二十四日 夕 罪と罰(前書き)

連続投稿だッ!!!

じゃ。

8・2 二十四日 夕 罪と罰

ココは窓の無いビル 内部

いつものようにポッドの中に入っているアレイスター「クロウリーは緋延と話していた。」

「統括理事会全員を今すぐこの場所に集めな」

「…話が見えないんだが」

「気にしなくていい、今から三十分以内に集まるか？」

「まあ、三十分もあれば集まるだろうさ。」

「…よし、それで何をする気だい？」

「ちよつと寿命前に三途の川を渡ってもらつ」

「…何か君を怒らせる事態になったのかい？」

「…ちよつとな。」

後お前にも罰は受けてもらつぞ」

「確かに統括理事会は私が作ったモノだが…」

「ココ数年彼らは独立していて私は何にも命令を出していないぞ？」

「お前が何にもせず放っておくから置き去り《チャイルドエラー》」

が犠牲になるんだよ」

「！ 彼らはまだそんな事やっていたのかい？」

いい加減無意味だから止めるように言ったはずなんだが…」

「…置き去り《チャイルドエラー》も一つの命だ。

学園都市の貢献なんてくだらない名目で奪うのは止めさせる。
金余っているんだから援助でもしてやったらどうだ？」

「…考えておくよ」

「よ・く・考えておけエ…」

「…」

「さて、もう行くが…」

「行くが…なんだい？」

コツコツと音をたてながらアレイスターの入っているポッドを通り
過ぎ…

下に何本があるコードの内の一つをおもむろに持ち、

ピンッ

と引き抜いた。

「!?!」

同時に、ポッドの電源が全て落ちる。

そう、引き抜いたのはコンセントである。

アレキスターは驚愕に染まるがそんなものお構いなしに次の行動に移る。

ポッドの横まで歩き、緋延は人差し指だけ”なり”、
端の辺りをブツ刺した。

「—————!?!」

何か叫んでいるが、電源を切ったせいで何も聞こえない。

ポント

抜くと、綺麗に丸にくり貫かれていた。
ポッドのガラス部分に刺したので、勿論中身の液は出てくる。

「……………ッ!!」

必死の形相になって中からポッドを叩く。
いつもは綺麗な顔だが、こうなると聖人も悪人もあったもんじゃない。

よく見れば液の中にいるのに大量の冷や汗が見える。
器用な奴だ、と思いながら緋延は無視する。

そのまま空間移動者のところまで行く。

その様子を見ていた空間移動者の女の子に話しかけられる

「あの…緋延様、アレイスター様が…あのままでは…」

「いいいいの、ちょっとした罰だから」

「…緋延様がそう言うのでしたらいいのですが…」

「まあそろそろヤバそうだな〜って感じたら土御門でも呼べばいい

を」

「了解しました、では行きましょう」

そんなやりとりをし、緋延と女の子は去って行った。

それから三十分後、

液が全て抜けたポッドの中で瀕死状態で発見されたアレイスターは、土御門に救出される。

それから数分後、とある廃ビルがいつのまにか消滅したのだという。崩されたような後も無く、

どこかへ運び出された後も無く、いきなり消えたのだという。

同時に行方不明者が数人出たみたいだが、その全員が独り身ということもあり特に話題にならなかったとか…。

8・2 二十四日 夕 罪と罰（後書き）

勝手に電源はコンセント供給にしてしまった。
反省も後悔もしていない。

では次回。

設定（前書き）

前に投稿した設定の改訂版。

けど前に投稿した時とそんなに変わってはいない。

8
1
k
g

体
重

1
9
3
c
m

身
長

?

年
齡

男

性
別

黒
鋼
緋
延

名
前

設
定

容姿

腰まで届く黒髪に赤のメッシュが入っている長髪。瞳は燃えるような赤。

(イメージはTOAのルーク長髪Ver.のもみ上げが兜甲児。)
体格も鍛えているのでガッチリしている。
顔もなかなか。

能力

不老不死

自身が魔神となったのでその副産物。

『マジンカイザー 魔神皇帝』

彼自身が『黒鋼緋延』であり『マジンカイザー』でもある。

誰かみたいに転生した訳でももない。

誰かみたいに神様に殺された訳でもない。

本人は知らないが、（なんとなくは分かっているが）選んだのは『大いなる意思』。

黒鋼緋延は”元居た”『彼の世界』においての役割が兜甲児でありマジンガーであった。

しかし、原因不明の光りにより次元の狭間に飛ばされてしまう。

そこで見たのは破壊されたマジンカイザーの変わり果てた姿。

それを見て、己の中の何かが反応し、無意識の内にそのマジンカイザーと融合してしまう。

さらに融合の余波でその次元が崩壊し、無数の穴の一つに落ちてしまふ。

そこから数個の世界を渡り、今に至る。

言わずも知れた最強の力の一角。

神を超え、悪魔をも倒せる究極の魔神の力。

彼もマジンカイザーでもあったので、融合には支障は無かった。

尚且つ、彼の世界での役割は兜甲児でありマジンカイザーでもあったので、

魔神としての力は”どこか”のマジンカイザーと融合したことにより跳ね上がった。

それにより、

神を滅し、悪魔をも消し去るほどの力になった。

「マジン・ゴー」

の掛け声で、発動時は目の周り（カイザー目の周りにある赤い紋様）と、

胸が紅に光り（Zの文字も浮かび上がる）、
紅蓮の炎が周りを囲み、その中から炎でできたカイザーパイルダー
が飛翔、

そしてパイルダーが緋延に向かい急降下し、

「パイルダー・オン」

の声と共に衝突、炎が全身を包み、紅蓮の柱が天に昇り、その姿を
現す。

スクランダーは叫べばどっから飛んてくる。

体の一部分だけの発現も可能。

変身時は2m強だが元の大きさ（4.5m）になることも可能。
元の大きさも一回り大きくなっている。

融合した際、

各種武装の出力は勿論だが、装甲もより堅牢なモノへとなっている。

その名も超合金ニューZ。

全体性能が超合金ニューZ の数百倍。

物理攻撃、エネルギー系、その他にも対魔等の魔法、魔術、呪術等
に対しても圧倒的な防御力を誇る。

ある程度だが人間の時にも超合金ニューZ の効果は出ている。

自己修復（HP回復大＋EN回復大）も可能だが傷つけられる事は
まず無い。

追加武装

ライティングブレイク

撃ち方はグレートとほぼ同じ。

ただし人差し指で撃ちだすのではなく、掌を向けて撃ちだす。
他の動作は同じ。

威力はグレートのサンダーブレイクの比ではない。

設定（後書き）

カイザーに電撃系の武装はあってもおかしくはない等。

てなわけで設定でした。

作者の気分、または話の展開によって書き足すかも知れません。

9 二十四日 夜 魔神と聖人と(前書き)

寒い、寒いよ。

てなわけです。

どぞ。

9 二十四日 夜 魔神と聖人と

昼の一悶着から数時間。

色々…というほどではないが、多少厄介事があり、小萌先生宅に夕方辺りに着く筈が結局夜になってしまった。てなわけでドアの前に来ている。

ピンポーン

と、ドアベルを鳴らすと「は〜い」という声と共に、ドアが開く。

ぬいぐるみパジャマを着た、上条の担任、月詠小萌が姿を現した。身長の高い緋延と並べば不思議と親子にしか見えないであろう。無論、小萌先生が子供である。

「あ、緋延ちゃんじゃないですか〜」

「こんばんは、先生。

アイツらいる?」

「上条ちゃんと一方ちゃんならあの子を連れて銭湯にいったですよ」

「ありや?入れ違いになつたか…」

「みたいですねえ。けど、そんなに時間は経ってないから今からで

も間に合うと思いますよ〜」

「んじゃ俺も向かうか…、んじゃ行きます」

「はいです〜」

財布から銭湯の料金とコーヒー牛乳二本分の金を出し、財布を先生に預け、いざ出発。

今日一日の疲れ（全然疲れていないのだが）を癒しに銭湯に…

向かったのだが…

.....

それは銭湯へ向かう大通りに差し掛かった時だった。

キン…

という耳鳴りに近い音と同時に雰囲気、気配、違和感を感じる。
緋延はこの感覚には覚えがあった。
そう、これは…

「人払いの結界か…」

「正解だよ、黒鋼緋延」

言い終わると同時に数日前に聞いた声が聞こえた。
声の方に振り向くと、赤髪の魔術師がタバコを吹かしながら数m離れた所にいた。

「数日振りか？炎の魔術師」

「そうだね」

「何の用かな？
俺はこれから銭湯へ行つて疲れを癒し、
上手いコーヒー牛乳を二本飲まなければいけないんだが」

その理由に、ステイルは額に青筋を浮かべるも怒鳴りたい衝動抑え

て冷静風に言う。

「…そもいかないんだよ、黒鋼緋延。
ココから先には通せないんでね」

「なんだ？

お前も銭湯に行きたい口か？

確かにこの時間ならピークは過ぎたから外人でもまあ気軽に入れる
だろうさ、

けどあの銭湯は刺青はダメじゃなかったかなあ…
でも見た感じ顔だけみたいだから大丈夫だと思うぞ？

あ、日本の文化を楽しむのは大いに結構だがコーヒー牛乳はやらん
ぞ？」

「…」

スタイルは顔を伏せ、震えている。
そんな様子を見た緋延ニヤケ顔で続けて言う。

「どうした、そんなに震えて？風邪か？
温まるんだったら日本の銭湯はいいぞ、体の芯まで温まるから」

言い終え、背を向けると炎剣が緋延の居た場所を斬り裂いた。

しかし手応えは無し、気配を感じ、ステイルは視線を上に向ける。緋延は悠々と街灯の上で座っていた。

「そんなに怒んなよ…」

「…」

スタツ

という軽快な音と共に着地、数mの距離を挟み、ステイルと対峙する。

ステイルは素人でも感じるほどの怒気を放っている。

緋延はニヤケて、戦闘の始まりとなる言葉を使った。

「俺に一瞬で倒されたのがそんなに悔しかったか？」

その言葉を言い終えた瞬間にステイルは炎剣を両手に持ち、地面を蹴った。

ステイルの魔術師としての技量は天才の部類に入る。体術も達人級なのだが、一つ欠点ではないが戦闘では欠点になってしまふ要因が一つ。

それは若いということ。簡単に言えばキレやすいのだ。キレれば当然冷静な時と比べ適切な判断力は低下する。

故に、攻撃は当てやすくなるのだ。

炎剣の間合いに到達し、交差させた炎剣を緋延に向かい薙ぐ。

「死にぶッ！？」

しかし、緋延に炎剣は届くことは無く、逆に攻撃を仕掛けたステイルは”横”に吹き飛ばされた。

だが緋延は動いていない。

「ぐ…」

ステイルは右の脇腹を押さえ、先ほどまで自分が居た場所を確認する…

「ヨオウ、魔術師イ…
ちよいと実験台になってもらうぜエ」

細い体、白い髪に白い肌、それと対を成すように黒い服装。

「貴様…あの時一緒に居た…」

「ああ、アクセラレータ一方通行だ」

ココ学園都市の頂点が立っていた。

「く…貴様に用は無い、
消されたくなければ家に帰るんだな」

「俺は用があるんだよ魔術師イ…
それと緋延ならもういないぜ？」

「なんだと!？」

周りを確認してみるも黒鋼緋延の姿は無い。

「…貴様、ヤツはどこだ？」

「さアね、テメエが知る必要はねエな」

「答える気は無い…か。
なら死んでもらう」

再び炎剣を出現させ、構えをとる。

「ハツハア！やってみなア魔術師イ！！」

心底楽しそうに笑う一方。

言い終わると同時にステイルは地を蹴り、一方を炎剣の間合いに入れる。

対する一方は間合いに入ったのは明らかなのに焦る様子も無く、未だに笑みを崩さず、ポケットに手をつ込みステイルを見ている。

ステイルは炎剣を薙ぎ、一方を斬った。
が…

「な!？」

「!？」

右薙ぎしてきた炎剣はベクトル操作により反射し、ステイルを逆に斬るはずだったのだが、
何故か”真上”に反射が働き、炎剣は一瞬虹色に光り、四散した。

「な、何をした!？」

ステイルに動揺が見て取れる。
だが一方は同様などはしていなかった。

ちよいと考えていたのだ。

反射は正常に働いた。働いた筈だが…
右から迫った攻撃を反射、ココまでいいイ。
だがソレが真上に行つて、しかもカラフル四散したのに意味が分からん。

なーンなーンですかア！？

…

まアクダラネエことを垂れていてもしょうがねエ…

緋延に言われて何個か演算の仕方を変えたのは用意してある。

試してみるかア…

「クカカ…どうしたア魔術師イ、

まだまだこれからだぜエ？」

「ク…」

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

「インデックスは返してもらいます」

聖人、神裂火織は己が武器二mを超える長刀・七天七刀を当麻の喉

元突きつけ、言った。

抜身ではなく、鞘に入れたままであるが。

この七天七刀、野太刀に見られがちだが、

古来より伝わる日本神道の儀式などで使われる『令刀』に分類される。

儀式用だからといって切れ味、頑丈さなどは決して劣っている訳ではない。

その長さ故、使い手がいないだけなのである。

アイツが何遍忘れたって、

何遍だって、友達になってやりやいいじゃねーか。

恐らく、神裂にとっては辛い言葉だ。

いや、インデックスに関わる者にとってはその言葉は…

だが、

当麻は引けない。

そつだ、ココで、こんなところで折れる訳にはいかねえ…！

鞘を両手で持ち、戦おうとする。

しかし、傷は痛み、血が白いYシャツに滲む。

その様子を見て、神裂は口を開く。

「その体で、まだ戦う気ですか？」

「る、せえよ…」

正直、立っているだけでも辛い。
だが…

「私を倒したところでどうにもなりませんよ。
教会全体から見れば私などこんな極東の島国出張させられる下っ端
にすぎません。」

「どうあがこうと…」

「…っるせえつつつてんだろツ！！」

怒声と共に、力を振り絞り七天七刀をずらし、右手を、打つ。

右手は神裂のデコを捉えた。

しかし、その身は既に満身創痕。
大した威力は無かった。

ズルツ

と力が抜ける。

しかし、力が抜け、倒れそうになりながらも言葉を神裂に向ける。

「てめえは…力があるから、仕方なく人を守ってんのかよ………？
そうじゃねえだろ！？守りたいモノがあるから力を手に入れたんだ
ろうが……！」

言えたのはここまでで、痛みに耐え切れず倒れてしまつ。
だが…倒れても尚、言葉を紡ぐ。

「俺は…さ、死ぬ気で戦つて、
たった一人の女の子も救えねーような…負け犬だよ。
けどアンタは……！」

拳に、自然と力が籠る。
爪はコンクリートでめくれるも、怒りがそれを感じなくさせる。

「その力が、そんな力があれば……
誰だって…何だって守れるのに………！！！」

その言葉に、神裂は揺らぐ。

揺らぐも、止めを刺すために七天七刀を構える。

その状況にも関わらず、当麻はなお言葉を続ける。

「アンタは何のために力をつけた…」

神裂は一瞬若干戸惑うも、七天七刀を振りかぶる。

「あんたはその手で誰を守りたかった！！！」

同時に、神裂は七天七刀を振り下ろす。

が…

バコオ！！

振り下ろした七天七刀は当麻には当たらず、地面を陥没させるに終える。

「な!?!」

何故だ!?!

振り下ろすところまでは”見ていた”のに。

瞬きほどの時間で、上条当麻が消えた。

頭は混乱し、体は固まり、どうにか思考を戻そうとしていた時、後ろから声が聞こえた。

「何のために力をつけた…?」か

「!?!」

後ろに勢い良く振り向き、声の主を確認する。

そこには、スタイルと同じくらいの高身長、黒く長い髪の毛、黒い服装。

その肩には、止めを刺そうとした上条当麻。

「何者です？」

「俺は黒鋼緋延」

「！！」

あなたがステイルの言っていた…
ステイルはどうしたんですか？」

「頼りになる友が相手（実験）をしている」

「そうですか…」

それで、何をしに来たのですか？」

「当麻を止めに来たんだが…遅かったようだな。
それと後一つ…」

「…」

そう言いながら当麻を横にならせる。

「アンタの腐った考えを、正すため…かな」

「…腐った？」

私の考えが…覚悟が腐っていると云うのですか？」

神裂の目つきが変わり、明らかな殺気、怒気を緋延に向けて放つ。

「ああ、腐っているぞ。」

最初から敵になっていた方がいい？

ふざける。

適当な理由言つといて逃げてんじゃねえぞクソが」

「逃げる…?」

常人ならその雰囲気だけで殺せそうなお中、緋延は平然と喋っている。

「ああそうさ、お前達は逃げている。」

あの子を大切に思うからこそ、

何遍でも、何遍でも友として共に傍に居てやろうと思わなかったのか？

そんなことはないだろう？

思ったはずだ、何度忘れても友達になると。

だが、お前達は逃げた。

あの子の目から。

あの子の運命から。

あの子の敵となることで。」

「違、う…お前に…何が…」

「何がわかるって？
…わかるさ、今まで仲間と、友と思っていた奴らに…
裏切られ、罵倒され、畏怖され、
敵として見られる辛さは…」

「え？」

緋延の顔は、何か色々と混じっているような表情だった。
悲しみ、諦め、喪失感。
主にその三つが見て取れるのだが…不思議と怒りや憎しみといった
感情は出ていなかった。

神裂は一瞬その顔を見て呆けてしまうが、すぐに構えをとる。
一呼吸。
口を開く。

「…ステイルが危険視する存在、今ココで倒します」

「…まあいいだろう、その馬鹿な考えはぶっ飛ばされないとわから
ないようだしな。」

『マジン・ゴー』

そう呟くと同時に目の周り、胸が赤く光り、炎がその身を包む。

少し遅れて、炎のパイルダーが飛翔する。

「発火能力!？」

地を蹴り、距離を置く神裂。

『パイルダー・オン』

静かに、そう言った。

同時に、炎のパイルダーが衝突し、紅蓮の柱が天に昇る。

「な、なんですか!？」

その柱の中で、目が光った。

瞬時に紅蓮の柱は消え去り、マジンカイザーが姿を現した。

『聖人よ、全力で来い。
さもなければ瞬く間に貴様は地に伏すことになるぞ』

「マ…マジン、カイザー…」

信じられないという表情で、その思考の中どころにか口を動かす。
思考が渦巻く中、本能として神裂は感じていた。

アレは本物だ、本物の魔神だ。

人として…いや、聖人として感じる。

アレは神だ。

私は…戦う…戦えるのか？

アレと？

いや、戦うしかない。

戦うしかない。

戦いたい。

聖人としての能力を全力で開放、七天七刀を握りなおし、
魔神に向かい口上を言う。

「神裂火織…参ります」

『来い、阿呆な聖人よ』

その言葉を聞き、今にも飛び出そうとしていた神裂の動きがピタッと止まる。

「…阿呆とはなんですか阿呆とは。私のどこが…」

『インデックスに対する考え』

「…もう結構です、いきます」

地を蹴り、同時に抜刀。

聖人の凄まじい脚力により一瞬で間合いに入れ、カイザーに斬りかかる。

しかしカイザーは左腕で防御、金属の衝突音が響く。

だが神裂は間髪入れず空中で体を捻り右脚で蹴りを出すもこれもアツサリ右手で止められる。

左脚で蹴りを出し、一旦離れようとする前に右脚をそのまま掴まれ

る。

そしてそのままブン投げられる。

凄まじい速度で投げられたにも関わらず、
神裂は空中で体制を建て直し、着地するも勢いを殺せず地面を数m
滑る。

「く…」

『そう焦るな、攻撃が単調になってるぞ?』

「焦ってなど…」

『まあそれも若さか。』

…出る、カイザーブレード』

言い放つの同時に、左肩から剣の柄が出現し、
ソレを右手で掴み、引き抜く。

現れたのは銀の刀身に金の柄のロングソードに似た剣が出てきた。

「剣…ですか」

『そ、剣対刀だ。』

見誤るな、感覚を研ぎ澄ませ、気を練りこみ、呼吸を整えろ』

「…」

その言葉に、神裂の頬に汗が一筋垂れる。

『…いくぞ』

地面を蹴ったのは同時。

一瞬で互いの間合いに入るが、カイザーの剣の方が早く、神裂の予想を上回る速度で振り下ろされる。神裂は咄嗟に防御するも、

ガギイイイイン！！！！

「ぐ…っあ…！！」

凄まじいまでの重さ、力に、避ければよかったと受けたことを後悔する。

受けた七天七刀は悲鳴を上げ、あまりの重さに、支えている足はコンクリートを陥没させる。

骨は軋み、筋肉は震え、腰も砕けそうになっている。

たった一撃受けただけで。

「くう…うああッ!!」

全力で、どうにか七天七刀を傾かせ、火花を上げながらすらすらことに成功する。

カイザーの一瞬の硬直の隙に後方へ飛び、再び距離をとる。

「ハア…ハア…」

神裂は思った。

初めてだ。

たった一撃受けただけでここまで追い詰められるのは。

とてつもない速さ、とんでもない重さ、凄まじい鋭さ、圧倒的な力。

これが…魔神…。

神裂は己の切り札を使うことを決意する。
そして七天七刀を鞘に収める。

『…』

一方、カイザーも神裂の様子を見て思っていた。

一撃でほとんどの力を使ったか…。

聖人とはいえ人間、よく持った方か。

正直、もうちょい耐えるかと思っただが…まあこんなもんか。
ん？

あの構えは居合いか…？

雰囲気が変わったな、来るか…？

『どつする？続けるか？』

「無論です、…いきますっ…！」

唯閃…！」

叫びと共に地面を蹴り、一気に間合いを詰める。

唯閃

神裂の切り札、必殺の抜刀術。

聖人の力を全力で開放し、体の負荷を惜しまずに繰り出す技である。

ギイイイインッ！！

今度はカイザーが受ける。

この時に、攻撃を仕掛けた神裂の七天七刀の刃が欠けてしまう。

やはり通らないッ！！

けどッ！！

だが刃が欠けてるにも関わらず、神裂は体術を混ぜた連撃を行う。

唐竹、逆風、逆袈裟、右斬り上、突きと連続で常人では捉えられないほどの高速斬撃を行うも、

斬撃は右手に握られているブレードで、体術は左手で全て捌かれる。ダメ押しで蹴りを繰り出しす、が勿論左手で防がれる。

しかし、この蹴りは攻撃のためでなく距離を手っ取り早く取るための手段である。

目論み通り、ソレは成功する。

蹴りでカイザーの左手を足場にし、後方にジャンプ。

その距離は、一足一刀。

「ハ、ハ、ハ…」

呼吸は乱れ、汗は滝のように出て、七天七刀を握る手の力はほぼ無に等しい。

『…当麻のことが心配なんでな、次で終わりにさせてもらう。バカな考えをするヤツは昔から…一発ぶん殴らないと治んないしな。いくぞ』

地を蹴り、地面が一瞬で砕け、先ほどより遙かに早く神裂に迫り、

『まずは、その刀』

横一閃

バキヤア!!!

「なあ!？」

神裂を傷つけること無く、七天七刀を真っ二つにし、

『考え直すことだな、
フッ!』

左足で踏み込み、体を捻り、左拳を神裂の腹に一撃。

「ッ!

声を上げる暇も無く、
神裂は一瞬で意識を刈り取られる。

一瞬の硬直の後、
ドサッ

と音をたて、うつぶせに倒れこむ。

『…』

一瞬、このまま置いていこうと思ったが、このスタイルでこの露出は凶器…いや、兵器だ（主に男子、一部女子）。

当然このままという訳にはいかず、軽くジャンプし近くのビルの屋上に寝かせる。

その場で黒鋼緋延の姿に戻る。

当麻のところまで戻り、一方にメールを打ち、当麻を担ぎ病院まで駆ける。

向かうはカエル医者のところ。

- - - - -

当麻を預け、一方からの返信を確認。

From: イッポ

sob: 無し

傷一つ無いが微妙に反射が効かんかったなア

助言感謝する

検討の余地アリアリ

帰って寝る

まあ無事か。

アイツのことだ、糸口はもう掴んでいるだろうから心配いらないか。

ふと、時計を見る。

PM 10:53

銭湯は十時までだ。

自分で言うのもなんだが、俺は銭湯が好きだ。

週に三回は必ず行っている。

風呂上りのコーヒー牛乳は必ず二本と決めている。

…

「ハア…」

にしても今日は厄日か？

一日に二回も戦闘…か。

嫌な予感がするな…

なんか…

デカイ事が起こりそうな気がするな…

にしても銭湯…

しょうがねえ、明日行くか。

9 二十四日 夜 魔神と聖人と（後書き）

皆様に質問です。

カイザーブレード

ショルダーカッター

ショルダースライサー

どれがいいと思いますか？

書いてて迷ったんですが、
とりあえずはカイザーブレードにしたのですが…。

カイザーブレードだと、必然的に胸の剣は、
ファイナルカイザーブレードになります。

他のだと胸の剣はカイザーブレードになります。

正直迷っています。

どれも呼び方は良いですし。

アドバイス、感想等待着っています。

ではまた、次回に。

10 二十八日 昼 首輪(前書き)

お待たせしました。

クウガの方が全く進まず、悩んでる内に遅れてしまいました。
申し訳ない。

どうぞ。

あれから、当麻が目を覚ますまで二日掛かった。

多少、青痣や切り傷等見られるが、

カエル医者の治療も迅速で的確だったので、大事には至らなかった。
ちなみにインデックスは二日間、当麻に付つきりだ。

俺と一方も病室に入ろうとしたのだが、すぐに引き返しちまった。
なぜかって？

インデックスのあんな顔を見ちゃあなあ…。

心配はしているんだが、ああも幸せな顔されちゃあ俺達は居るだけ
邪魔ってもんだ。

お呼びでないってわけ。

ハア…

これでとうとう当麻もリア充の仲間入りか。

あと心配なのは一方か…

アイツの相手を見つけるのは至難の業だぞ…。

…まあいい。

とりあえずは、小萌先生宅に戻って当麻に話を聞くとするか。

- - - - -

現在の時刻は丁度、AM0:00 二十八日になったところだ。

「三日…か。」

「そう、そしてソレが今日なんだ…」

話を聞くと、インデックスの記憶は一年しかもたないらしい。
なぜか。

それは記憶の大半を魔道書が占めてしまい、
その分他の記憶も入るのだが一年分しかもたず、
結果、脳を圧迫してしまい死に至らしめるというのだ。

そのタイムリミットが今日、というわけだ。
そのために神裂、ステイルは彼女を保護し、記憶破壊をするみたい
だ。

うゝむ…

なんか胡散臭いな。

なんだ…この妙な違和感は。

何か忘れてる気がしないでもないんだが…。

「緋延、なんかならねえか!？」

肩にを揺すりながら大声で言う当麻。

「おちつけ…昼まで時間をくれ。

ちよいと色々と確認してみる。

とりあえず今日は寝ろ、まだ怪我は完全に治っていないんだから」

「あ、ああ…わかった」

「それと、お前はこの子の傍に居てやれ」

「ああ…」

となりの部屋では、気持ち良く眠るインデックスの寝息が聞こえる。
ちなみに、小萌先生は学校で何やら残業のご様子。

「じゃあ、また来る」

「ああ、おやすみ」

「おやすみ」

靴を履き、扉を音をたてないように静かに閉め、
小萌先生宅を後にした。

.....

現在の時刻は AM 10 : 23 木山春生と初めて会った喫茶店に
来ている。

「一方のヤツ遅いな……」

待ち合わせは十時の筈なのだが……。
と思いながらコーヒーを飲んでいると……

「悪い、遅れた」

いつもと同じ服装で、一方通行が現れた。

「いや、いい感じに朝食をとれた」

「ソウかい。」

で、進展はあったのか？」

二人分のコーヒーを注文し、早速話しに移る。

「残念だが、お二人さんは純愛道まっしぐらだ」

「残念。」

…で、話つてのはア？」

コーヒー到着。

二人の色恋沙汰の話の雰囲気から一転、
重い雰囲気が変わり一方は鋭い目をさらに尖らせ、聞いてきた。

「ああ、インデックスの記憶、いや脳に関して聞きたい」

「脳？脳だったら小萌に聞けばいいんじゃないか？
アイツは脳の分野に関しちゃうかなりのモンだぜ？」

「あんまり巻き込みたくないんでな。
恐らく、この話をする事になっちまうだろう。
あの人は何かと勘がいいし」

「女の勘ってやつかア」

「経験上、女の勘ってのは怖いぜ？」

「…」

「まあいい、」

さて、本題だ……」

簡単に説明しよう。

カクカクシカジカ四角い【ピー】は、
ダイツへ。

「…あア？」

「一年分しかもたないイ？」

「らしいんだよ。」

さらにタイムリミットは今日。

故に魔術師はあの子を保護し、記憶を無くすために来たらしいぜ」「

「…そいつアおかしいぜ？」

一方は呆れたように、心底面倒くさそうに言った。

「いいか？」

いくら完全記憶能力があつて、一万三千の魔道書が頭ん中に入つていようと、

一年で記憶がイッパイになつちまうなんてことにはならねエんだよ。人間の脳つてのはよオ」「

「マジか…！？」

「マジもマジ、オオマジ」

「冷静に大体考えてもみろオ、15%で一年分の記憶が埋まるんなら人類仲良く幼稚園でこの世からオサラバしてるぜ？」

「……」

迂闊……

俺としたことが……

「お前ともあるう者が珍しく頭が回らなかったようだなア。

……まあ簡単に説明すと、だア……

憶えるモノに対して脳の入れる場所が違うんだよ。

よくドラマで記憶喪失が取り上げられることもあるだろ？

実際ああなつても歩き方、食べ方、金の勘定、服の着かたを忘れるなんてことは無い。

それは何故か。

脳の中の入ってる場所が違うからだ。

だからだ、何十万冊本を覚えようと、他の記憶がどうこうなるわけじゃねエ」

「……」

そうだ、よく考えればおかしいことだらけじゃないか。

十万三千冊の魔道書。

野放しにしてるわけないよな。

「騙されていた…か」

「まんまとなア」

当麻も冷静になればすぐに分かるだろうこの矛盾。焦ってるから今の当麻には無理な話だろうが…話せば即座に理解するだろう。

「となると、あの魔術師達も気づいてないな」

「…だな」

「あっちも騙されていたわけか…」

「…」

「ここで、お互いコーヒーを飲み干す。」

「…さて、クソったれな運命を破壊しに行くか」

「俺も混ぜてもらおうか」

会計を済ませ、ファミレスから小萌先生宅に向かった。

A M 11:43

- - - - -

「てなわけだ…当麻」

先ほど分かった事を、簡単に簡潔に説明した。

「…そう、か」

そう呟きながら、
悔しそうに、苦しそうに、
怒りの表情で、
怪我をしているにも関わらず、拳を音が聞こえるほど力を籠めて握り締めていた。

「…血が出てんぞ」

「…ああ」

一方が言い、当麻は手を握り締めていた手をゆっくりと開いた。
地面には、数滴の血が垂れていた。

「話を続けるぞ」

「あ、ああ…」

「この事実から推測するにだ、
恐らく、定期的に発動する術式がインデックスの体のどこかにある筈だ。
推測だが、脳に作用する術だから脳に近いところだろう」

「脳に…」

「近イところねエ…」

当麻、一方は呟きながらも考える。
緋延は続ける。

「恐らく、首から上だ」

首から上ねえ…
と二人そろって声を出す。

「そこで鍵になるのが当麻、お前だ」

「オ、俺え！？」

「そう、お前の幻想殺し《イメージブレイカー》だ」

「！…！」

当麻に緊張が走る。

「その力が、

あの子の

これまでを破壊し、

これからを救うんだ」

「俺の…力が」

フッ

と当麻に笑みがこぼれる。

「俺は最初、この力は何の役にもたたない力だと思ったんだ。けど…こうやって、それも人助けの役立つなんて…」

「当麻ソレを言うのはまだ早いぞ」

「？」

「そオだ…このクソつたれな件が片アついたら言うセリフだ」

その言葉を聞き、

当麻の顔が一気に明るくなる。

「ああー!!」

「よし、あの子の元へ急ぐぞ」

「おうー!!」

.....

「……ねえな」

「……」

「……ない」

あらから小萌先生宅へ戻り、インデックスを手刀で気絶させ首から上を見てみるも…

ない。

「首の上だと思ったんだがなあ…
体の方か？」

「いや、それはない」

「なんで言いきれる？」

「それは…」

黙りこくり、何やら赤くなる当麻。

…

コイツ…まさか…

と、よからぬことを考えていると一方が口を開く。

「…なア」

「あん？
なんだ一方」

「なにもよオ、見えるところとは限らねェんじゃねェか？」

「「…」」

緋延、当麻二人して目を見開いて一方を見る。

「…キメエ、見んな」

「よくやった一方」

「そつだよな、見えるところとは限らないもんな」

「となるとだア…」

「鼻の穴？」

「いや、ソレはねェ」

「耳は？」

「…ないと信じたいな」

「んじゃ口」

「ありそうだなア」

「…見てみるか」

とりあえず当麻が口を開け、
緋延と一方が覗き込む。

「ビンゴ…！」

「あつたのか!？」

「あア…見てみな。気色悪イのがあからよオ」

緋延と交代してもらい、今度は当麻が覗き込む。

「コイツか…!!」

あつた。

一方の言つ通り気色悪い、見たこと無い文字のようなモノが喉の奥に。

「よし、今すぐ」

「待て、当麻」

すぐさま実行しようとする当麻に待ったをかける。

「なんだよ!?!」

「ココでやる気か?」

「あ……」

「焦りすぎだア、当麻」

「大体こういう類のモンは何かしら仕掛けてあると考えた方がいい」

そう、殆どのこういうモノには何らかの迎撃装置みたいなモノが付いているものだ。

たとえ付いていない場合でもそれなりの広さの人気の無い場所を選

ぶべきだ。

ソレが予め判っていれば対策のとりようがあるのだが、まったく判っていない為、慎重にならざるおえない。

「…そうだな、悪かった二人とも」

「一分でも早く救ってやりたい気持ちは分かる。だがそう焦っては駄目だ。できることもできなくなってしまう」

「言葉のとおりだ…当麻」

「ああ…でもこの近くでそんな場所あったか？」

「…それは今考え中だ」

「…」

肝心のそれなりに広く、人気のない場所の検討が見つからない。室内は勿論駄目である。外、なのだが今現在の時間は AM 14:48 どこ行っても人ばかりである。

「ここで、三個か選択肢がある」

「なんだ？」

「聞かせるオ…」

スッ

と人差し指を立てて、前に出す。
同時に口を開く。

「一つ目。」

深夜まで待ち、郊外、廃ビル等人気のなく、なおかつ戦闘のしやすい場所での実行。

これは若干賭けだ。

タイムリミットに迫るにつれて苦しむインデックスの姿を見て、我慢しなければならぬことと、

100%来るであろう魔術師との戦闘をどう対処するかだ。

魔術師達は俺と一方を抑える、これはいい。

だがインデックスのアレを破壊途中に、

迎撃装置の類が発動した時、運悪く俺達が戦闘中だった場合は加勢できない。

つまりは未知の力にお前一人で対処しなければならないことだ」

「…そうだよな、アイツらが諦めるとは思えないもんな」

「俺アまだ魔術に対しては微妙なラインだ。

反射も効いてるんだがどうもおかしい…」

ま、負ける気はサラサラねエけどな」

うーん…
と全員で唸る。

再び緋延の手が前に出て、指が二つ立つ。

「続けるぞ、
二つ目だ。」

今すぐ郊外、または廃ビル等も場所に即座に移動し実行する。」

「ぶつつけ本番ってわけだな」

「これは正に一か八かだ」

「だが人目につかねエ場所でもまだ陽も高い。
時間はかけてらんねエぜ？」

「ああ、コレでいく場合はスピードが勝負だ」

「…だな」

「ついでに言えば、魔術師達にも気づかれてはならないからな」

ふう…
と一息。

緋延の指が三つに立つ。

「三つ目、これが最後の選択肢だ。
夜までに魔術師を説得または協力を仰ぎ、郊外、廃ビル等の場所
で人払いの結界を張った上で実行。
最も難易度が高いが被害等を考えた場合はコレが最も安全かつ確
実だ」

「たしかにそうだけど…説得かあ…」

「たしかに最も理想的な案だが、最も無謀な案でもあるなア」

くわえれば根本的な問題として、脳の話が理解できるかどうか、
恐らく、科学分野に関してはそこまで詳しくないだろうが、
頑張れば理解できるだろう。
だがソレを納得できるかどうかは別の話だが。

さて、どうするかね…。

どの選択肢もリスクを伴う…。

「決めるのはお前だ、当麻」

「あ、ああ…」

「迷ってる時間は多少ならあるがア…、
あんまりゆっくりとはしてらんねエぞ？」

シン…

と一気に静まりかえり、当麻は顔を伏せる。
緋延と一方は黙って当麻を見つめている。

数秒、
当麻はゆっくりと顔を上げ、口を開く。

「俺は…」

10 二十八日 昼 首輪（後書き）

さてどうしようか…

一方に竜王の殺息をぶつけるのも面白そうだが…
そうになると俺の頭がやられそうだ…

アドバイス、感想等待着っています！！

では、また次回。

11 二十八日 夕 首輪(前書き)

マジ遅くなって申し訳ない。

一回全部消えたんだよ…丸々一話分…。

今回は大して動きはないです。

では、どうぞ。

11 二十八日 夕 首輪

意を決し、当麻は言う。

「俺は、魔術師達を説得してからインデックスを助けたい!!」

確固たる決意をその瞳に宿し、二人を見た。

フッ

と笑みがこぼれ、

「決まりだな」

「あア…」

決まりだな。

とは言っても、ほぼ100%の確立でこの選択肢でいくことは予想できた。

なんせ、当麻だから…だ。

「そつと決まれば早速魔術師達を呼ぶか」

「「呼ぶ（ウ）！？」」

「ああ、そつだ」

なにを言っているんだコイツは？
みたいな目で見てくる。

「ああ、俺もついさっき気づいたんだがな。
窓の外にチラツと視線を向けたらあのビルの上から見てたんで、
まだ移動していないみたいだから”呼ぶ”と言っただ」

「あのビルって…どれだよ？」

当麻の視線の先、

一般的にビルと呼ばれる物が十数個は見える。

”あの”とは言われてもサッパリである。

「ああ、すまん。」

丁度この窓から見て左から三番目のビルの上だ」

「わかんねエよ……」

具体的に言われても自身の視力では限界があるのでビルは確認でき
るが、
その上にいる人間二人を見分けるなんてことは6・0位なければ無
理である。

「悪い悪い。」

じゃ、さっそく呼ぶぞ」

と、窓の外、緋延曰く左から三番目のビルの屋上に向かい手招きを
する。

.....

「マジかよ……」

「……」

緋延が手招きをして数分後。

驚愕に染まる当麻と一方の前に、なんと魔術師達がいるのだ。

微妙な空気が漂うそんな中、緋延が口を開く。

「よう、数日振りか？」

「……ええ、そうですね」

「……」

緋延の問いに神裂は普通に、ステイルは無言で睨めつける。

「それで？」

「なんの用ですか？」

「用も何もないだろ、アレを渡すために呼んだんだろ？」

先ほどの表情から打って変わって、

若干勝ち誇ったような顔で、銜えているタバコに手をやる。

しかし、緋延が真っ向から否定する。

「いや、違う」

ピク

とステイルの眉が動く。

「じゃあ何だというんだ？」

「…当麻、お前が言うんだろ？」

「ああ…」

言い終わると同時に、当麻が一步前に入る。

一時の間、口を開く。

「あんたらに、インデックスを助けるのに協力してほしい」

一瞬の間があり、ステイルが口を開く。

「何かと思えば…そんなことを言うためにボク達を呼んだのかい？」

「ああ」

ステイルはソレを鼻で笑い、軽く息を吐く。
そして、

「ふざけるなよ！貴様ツ！！
助けるだど！？」

そんな方法は無いんだよ！

あつたらなあ…とつくにあの子は救われているんだよ…！

僕が…僕達がやっているんだよ…

その方法を見つけて…救えているはずなんだよ…

あの子は…」

怒り、当麻の胸倉を掴みながら叫ぶも段々と声に力が無くなり、顔を伏せる。

「…方法はある。
完全に、完璧に救い出す方法が」

一旦なくなっていた胸倉を掴む力が再び強まり、伏せていた顔を勢いよく上げ、
当麻を睨みつける。

「まだそんなことを…!!」

「あるんだよ、ステイル」マグヌス」

今にも殴りかかりそうな勢いのステイルを、
緋延の言葉が止める。

「…」

無言のまま、怒りの表情を露骨に出した顔を緋延に向ける。

「悪ふざけでもなく、挑発でもない。
もう一回言っぞ。」

インデックスを救う方法がある、それに協力しろ」

まだ言うか、そんな視線でステイルが緋延を睨む。
対する緋延も視線ははずさない。
が、神裂が震える声を絞り出す。

「それは…本当、なのですか？」

「神裂!？」

ステイルは驚く。

まさか神裂からそんな言葉が出ようとは。

「本当だとも、聖人よ。
故に、話を聞け」

「…わかりました」

「神裂！」

ステイルは叫ぶも、神裂が無言で首を横に数回振る。
それを見てステイルは洪々と大人しくなる。

「感謝する。」

さて、事は急速に進んでいる。手短かに説明する。
当麻、一方」

「ああ」

「…ああ」

まずは脳の事を説明。

次に15%で脳の要領の一年分使うという馬鹿な事実。
冷静さを欠いていた謝罪。

そして、そこから導き出される答え…それは、

「なんらかの魔術で、一年が迫ることに強制的に記憶を消さない
死ぬ、
という術式をかけられた…」

「…バカな…魔術師である僕達がそれに気が付かないなんて…」

神裂は悔しそうに拳を握り締め、地面に血が滴る。
ステイルは怒りの表情で全身を震わせている。

当麻もその気持ちは分かる。
が、今は一刻を争う。
悔しがって、怒るのは後でもできるのだから。

「続けるぞ。」

それで、刻印らしきモノをインデックスの口に発見した」

「「!!」」

「そこまで分かればあとは簡単だア…
当麻の右手でコイツをブチ壊す」

「あの力か…」

ステイルは経験があるから知っている。
あの右手に己の炎が掻き消されたことを。

「それで、あんた達のこの前使った…えーと…」

「人払いの結界？」

「そう！それをやってほしいんだ」

「…大体分かった、だが」

ステイルは再び当麻を睨む。

「貴様の右手…効かなかった場合はどうする？」

当麻の背中に冷たいモノが流れる。

それは考えてはなかった。

そうだ、もしこの右手が効かなかったらどうすんだ？
この子を…救えないのか…。

黙ってしまった当麻。
ステイルもただ何も言わず、じっと見つめている。

沈黙。

それを破ったのは、緋延だった。

「大丈夫だ、当麻」

バツと、
全員の視線が、緋延に向く。

「お前の右手でしか、あの子は救えない」

そう、当たり前のようにそう言ったのだ。

あまりに当然のように言ったので全員が呆けてしまっている。

一瞬の沈黙、破ったのは…

「ハハ…、わかったぜ。
やってやるうじゃんか!」

当麻の声だった。
続けて神裂も、

「…ステイル」

「く…だが…」

「信じて、力を貸しましょう。彼らに」

嫌々な視線を神裂に向けたが、ステイルは向けたことを後悔する。
神裂の目を見てしまった。

その目を。

「…。

ああ、わかったよ…。

ただし、僕は人払いの結界以外は何も手伝いはしないからな…！」

「…十分だ。感謝するぞ、炎の魔術師よ」

ツンデレだな。

と緋延は思った。

「そオと決まれば…、早エほうがいインじゃねエか？」

「ああ、そのとおりだ」

「場所は決まっている、ここに先に行っていてくれ」

そう言い、地図の書いてある紙を神裂とステイルに渡す。

「一方も道案内がてら、一緒に行ってくれるか？」

「あア…（なら、アイツで少し試させてもらっか）」

あの日以来、対魔術用演算を新たに練り直したのでその試しをしたかったのだが、協力する、と決まり半ば諦めかけていたのだがここでチャンスが来た。

当麻と緋延がインデックスを連れ、この場所まで来る間、ステイルにもう一度魔術を放ってもらおうと考えたのだ。

とは言うものの、そこまで時間があるわけではない。

恐らく緋延は当麻とインデックスをスクランダーを使って運んでくるだろうから、試せるとしても一回か二回だろう。

だが、二回もできれば十分である。
なにせ、今回の対魔術用演算は自信があるのだ。

実際のところ、あの日に幾つかその場で即興で作った対魔術用演算で大体は掴めている。

あの時、ステイルは緋延に逃げられたことと、自分の魔術がおかしな防がれ方をされたことにより、怒りと焦りが自身を殆ど支配し、馬鹿の一つ覚えのようにバカスカ炎を撃つては一方に防がれるという冷静さを欠いた戦いをしてしまっていた。

故に、戦いの終わりはバカスカ魔術を使ったことにより魔力切れを起こし、

何！？と自分の愚かさや過ちを気づき、不味い、と僅かな隙を作っ
てしまい、

その隙を一方が見逃す訳も無く、

一方に見事なまでに顎を捕らえられた拳を入れられ、意識を失ってしまったのだった。

そんな回想を頭の中で終え、
ニヤリ、と誰にも気づかれないこと無く一方は悪い笑みを浮かべる。

「わかりました、貴方達が到着次第すぐ結界を張れるようにしておきます」

「そうしてくれると助かる」

「…」

「…たのんだぞ、炎の」

「…言われなくてもわかっている」

そう言って、一足先に歩き出すステイル。

「…では」

少し遅れて、神裂も歩き出す。

「…」

「一方は何やら悪巧みをしている顔でその後を着いて行く。」

「…よし、行くぞ緋延」

「ああ」

11 二十八日 タ 首輪（後書き）

なんか最初に書いていたのと微妙に違う感じがしないでもない。

全く関係無いが没案タイトル集。

1 とある疾風の魔装機神

オリ主、最強モノ、魔神皇帝のサイバスター版。

2 とある空我の究極ノ闇

オリ主、最強モノ、グロンギの完全組織化、一対多。

3 とある流派は東方不敗

オリ主、テンプレ最強TS、気合で全員ブツ飛ばす。

てなものも考えていた。

次回、首輪破壊編 最終話！！

12 二十八日 夜 首輪（前書き）

皆様、クリスマスはどうでしたか？

俺は只ひたすらに、

リア充チネ

と街行くカップル共を見て思っていました。

どぞ。

12 二十八日 夜 首輪

インデックを助けるための場所に全員が移動完了した。

結界も張り、準備は万端なのだが…

そこには…

正座した学園都市第一位と炎の魔術師がいた。

一方通行はそっぽを向いて面倒臭そうな顔をしているが、ステイルはもう死ぬんじゃない？てくらい顔が青くなっている。

それは何故か？

正座した（させられた）彼らの目の前には、仁王立ちした魔神が腕を組んで二人を見下ろしているのだから。断っておくが、2mの人間サイズで。だ。

ギーン！

と両目が光り、魔神から声が発せられる。

『…この距離から最高出力のファイヤーブラスター撃ってやろうか？』

「そ…それは勘弁願いたいな…」

「…」

実際撃つたら消し飛ぶどころか、存在ごと消えるんじゃないか？
と思う今日この頃。

さて、何故こんなことになっているのか？
ということをやつぱり説明しよう。

一方、神裂、ステイル指定の場所に到着。

一方は考え（対魔術用演算の実験）を実行に移す。

モノを頼むことを知らない（したくない）一方、いきなり攻撃をし
かける。

ステイルキレる。

一方も気分がハイになる。

「この前の続きといこうかア！！」

ステイルもマジになる。

「イノケンティウスウウ！！」

神裂、呆れる。

結果、焼け野原の出来上がり。

緋延、当麻、インデックス（睡眠中）到着。

緋延、あまりの惨状にキレる。

カイザーになり、鉄拳制裁。

今こじろ。

「はあ…」

まったく、呆れを通り越して何にも言えねえや」

「んなことよりイ…さっさと済ませた方がいいんじゃないの？」

どの口が言つか、一方よ。

大方お前のせいだろうが。

と心の中での意見は全員が満場一致。

『…さて、ふざけるのもこじろ辺で終わるっか』

「…ああ」

「…」

カイザーの一言で、場の雰囲気は一変する。

『やるぞ、当麻、一方。』

覚悟は…できているか?』

「ハッ…だアれに言ってやがる」

「…」

愚問だ、と言わんばかりに一方は応える。
しかし、肝心の当麻からは返事が無い。

一時の間。

当麻は言う。

「よし、やるぞ」

- - - - -

当麻は寝ているインデックスを起こさぬよう、そと地面に下ろす。ゆっくりと背を地面に着け、後頭部を押さえながらゆっくりと仰向けにする。

準備は整った。

すでにカイザーとなつてゐる緋延を含め、一方、神裂、ステイルも何時でも戦闘を始められるよう、臨戦体制だ。と、ここでカイザーが忘れていた用件を神裂に言う。

『聖人、換えの武器はあるのか？』

「…あるにはあるのですが、今回は間に合わなかったので折れていますが七天七刀を使います」

スッ

と柄に手をかけ、元の長さの半分になつた七天七刀を抜いて見せる。

半分、とはいえ七天七刀は身の丈を越える長刀である。
折れているとはいえその長さは普通の刀とそう変わらない。

が、カイザーはあるものを発見する。

『ヒビが入ってるじゃねえか…しかもその入り具合は茎^{ナカユ}まで達して
いるな』

「…ええ、あなたの一撃が凄まじく、たった一回でこうなっ
てしまいました」

茎^{ナカユ}とは刀身の柄に被われる部分のことで、
中に込める。という意味で命名されたので部分。
作成者の銘を切るのが古来よりの習わしである。

そして、刀を支える最も重要な部分である。

そこにヒビが入るということは刀としては最早使い物にならないと
同義である。

今までの愛着もあるのだろう、七天七刀を使いたいののはわかる。
だがあと一回でも戦闘に使用すれば七天七刀は砕け散るであろう。
それはなんか癪に障るのである行動に移す。

『聖人、七天七刀は使うな。
再び火を入れ、新たなモノに作り変えてもらえ』

「しかし…」

『変わりに、我が刃を渡そう』

「!?!」

『…出る、カイザーブレード』

カイザーが言い終わると同時に、左肩から金の柄が出現する。
それをゆっくりと引き抜く。

神裂は二度目となる、その剣を見た。

己の七天七刀を一閃で真つ二つにした魔神の剣を。

一瞬、剣を持っている腕が消え、
ヒュン

と風切り音が一回聞こえ、砂塵が巻き上がる。

カイザーはゆっくりと神裂の方を向き、言う。

『その換えとやらが来るまで、貸しておいてやる』

スッ

と神裂の前にカイザーブレードが差し出される。

『お前用に若干重量とかを変えといたから安心しな』

「ほ…、ほんとうに…いいのですか？」

『…一度は言わんぞ』

「は、はい…！」

若干顔を赤くさせながら、神裂はカイザーブレードを受け取る。

ズシッ…

…重い

神裂が思った素直な感想だ。

七天七刀と比べ長さこそ劣るものの、剣としては他のものより一周りほど大きい。

そして、重量は比べ物にならないくらい重い。

けど…、

確かめるように数回、両手でしっかりと持ち空を斬る。

「扱ってみせます」

一瞬カイザーが笑ったように見えた。
表情の読めない、その黒鋼の下で。

『お前の全力にも難なく耐える。
安心して使え』

「…はい」

『よし、ゆくぞ』

「はい」

.....

唾を飲み込み、喉が撥ねるのが分かる。
全身が震えるのも分かる。
数多の幻想を打ち破ってきたその右手が震えが一層強いのも分かる。

だが、こんなところで震えていられない。

まだ目の前の彼女を救っていない。

怖気づいていられない。

この右手で…

俺が…

俺がやるんだ。

目を閉じ…

深く、深く深呼吸。

後ろには緋延と一方もいる。
そうだ、何も心配はいらない。

目を、ゆっくりと開ける。

「よし、やるぞ」

インデックスの横に、片膝立ちになり口をそっと開ける。

二度目になる、不気味な刻印を見る。

「こんな…こんなものに…」

彼女は…

一度、右手を強く握りしめ、ゆっくりと広げる。

「ちょっと苦しいけど…ガマンしてくれよインデックス」

小さな口に、右手を入れる。

「う…」

苦しそうな声を上げるインデックス。

ゴメン…

もう少し、もう少しで…

指先が届く。

しかし、そう簡単にはいかなかった。

突如当麻は浮遊感に襲われる。

数秒遅れて、背中に軽い衝撃。

顔を上げれば、一方の姿が目に映る。

どうやら片手で受け止めてくれたようだ。

だが、視線は前から動かない。

よく見れば、僅かだが冷や汗もかいている。

当麻もつられて、ゆっくりと視線をインデックスのほうにやる。

そこには…

「……告」

インデックスはゆっくりと、どこのホラーのように起き上がり、

「…警告！」

無機質な声で、暗闇を思わせる光りのない瞳で、

「Index - Librorum - Prohibitorum

- 禁書目録の「首輪」第一から第三までの全結界の貫通を確認」

黒い、背筋が凍るような力を纏わせ、

「十万三千冊の『書庫』の保護のため侵入者の迎撃を優先します」

当麻を攻撃した。

.....

インデックスの前に魔方陣が二つ出現し、その間の空間が歪む。
そして…

「ッ！！」

何かが見えた。
どす黒い…
絶望のような

覆い尽くすような
恐れのような
死のような

何か

「ドラゴン・プレス
竜王の殺息!?!」

「バカな!?!あの子に魔術は使えないはずだ!?!」

「実際使ってるじゃねえか!」

「話してる場合かア!来るぞ!?!」

「ちい!」

歪みから、ビームのような光りが発射され当麻達を襲う。

「うおっ!?!」

「チッ!」

未だ起き上がれない当麻、このままでは不味いと判断し一方が前に出て、光りを受ける。
頭をフル回転し、対魔術用演算の反射をする。

「オオオツ!!」

光り…竜王の殺息を^{ドラゴン・プレス}反射するも、真上にいつてしまう。

余談だがこの光りは大気圏を突破し、
衛星軌道上の樹形図の設計者を^{ツリーダイアグラム}破壊してしまった。

それを彼らが知るのは数時間後の話。

「グウウウウ!?!」

保たねエ…
演算が段々追いつかなくなってきたやがる。
なんて攻撃だ、あの赤毛野郎とはダンチだなア…

「一方! 変われ!!」

「当麻!？」

ええイ!クソツタレ!!」

有無を言わさず、当麻は一方の前に躍り出る。

そして、己の右手を竜王の息吹にかざす。

やはり、というか当麻の右手で無効化はしているがその特性上、継続的に攻撃を受けると右手の処理が追いつかない。

イノケンティウスもそうだが、こういう攻撃は当麻とは相性が悪い。

暫くは保ったが、その威力に耐え切れず当麻の右手が弾かれる。

「しまっ…!!」

「てないぜ?当麻」

攻撃を喰らう。

と思った矢先、当麻の前にカイザーとなった緋延が立ち塞がった。

「緋延!!」

「案ずるな、この程度なら問題無い」

顔だけ当麻に向けそう言う。

恐る恐る見れば、カイザーの言うとおり、右腕一本で余裕で防いでいる。

だが…

「ッ!？」

緋延!！」

「あ……」

しかし、突如インデックスから黒く、人間の胴より太い何かがカイザーを後方へ吹き飛ばす。

その勢いは凄まじく、一瞬で当麻達を通り越し、轟音と共に煙が後方で上がる。

そして、全員が威圧感と悪寒を感じ、インデックスを見る。

全員が、目を見開く。

「じよ、冗談だろ?」

「…オイオイ、魔術ってのはなんでもアリか？」

「…バカ、な」

「…こんな…」

全員の視線の先、カイザーを吹っ飛ばしたモノ。

それは現代では伝説として、空想上のモノといて伝えられているモノ。

あるモノは火を、あるモノは氷を、あるモノは風を操り、

時には味方として、時には敵として、時には傍観者として、

あらゆる生物の頂点として君臨していた、巨大な…

「ギャオオオオオオオオオオ！！！！！！」

竜、とよばれるモノだった。

12 二十八日 夜 首輪（後書き）

まだ終わらないという。

次回で終わります。

また関係ないですが、

ボツ案、やろうかなあと思ってる集。

金ピカ？いいえ、銀ピカです。

オリ主、テンプレで王の財宝もらってネギま！？へ。

作者の趣味で金が嫌いなので銀で。

真・機動戦士ガンダム00

原因不明の現象で、ゲッターチームが00の世界へ。

ゲッター線とGN粒子の恐るべき関係とは！？

エネルギー色が同じ緑だからいけるんじゃない？的な案。

閃光のリリカル・センチネル

オリ主、テンプレでガンダムになれる力を授かった！？

しゃあねえ、ハッピーエンド目指して行きますかね…。

作者の趣味全開、S、EX-S、F91が主に登場。

黒き闇のダラダラ散歩

究極の黒・白の散歩がどうも上手くいかずまた再編案。

どツかの世界に行く前の、グロンギやアンノウンの戦いの話。
クロスで、スクールランブル。

てのが頭の中で渦巻いている。

どうすればいいんだ…

次回、二十九日 記憶

ではまた〜。

13 二十九日 記憶（前書き）

あけおめことよろ。

新年になってからもう少しで一週間。

皆様如何お過ごしでしょうか。

自分は特になにも変わったことは無しです。

最近はめっぱう寒いので体調管理に気を付けて下さい。

どうぞ。

13 二十九日 記憶

黄に輝く竜の咆哮は大気を震わせ、当麻達を畏縮させる。

思わず耳を両手で塞ぐも、大した意味は無い。

某狩りゲームでは必要不可欠とされてる高級耳栓の偉大さが良くわかる。

そんな中でも、当麻は咆哮する竜を見る。

鋭く尖った鱗、並大抵のことでは傷つきそうもない甲殻、

全てを切り裂かんばかりの威圧を放つ爪と牙、その巨体に似合う雄

雄しい翼、

見ただけで気絶しそうな鋭い深紅の眼…

まごうことなき竜である。

ゲーム、絵本、アニメでしか見たことがない、その本物がいる。

正直、見れたのは嬉しい。

が、アレを相手にするとなれば話は別だ。

喜んではいられない、寧ろ遠慮願いたい。

しかし、そうは言っていられない。

インデックスを救うため、引いてはいけない。

前に…

前にでなければ。

己を奮い立たせ、
当麻は一步を踏み出す。

それと同時に、全員が戦闘体勢をとる。

しかし

突如その場にいる全員が、死んだと錯覚すほどの…

重い

重い

重い

殺気が押し掛かる

そして…

『蜥蜴風情が…』

動けなかった。

竜を含め誰一人として、その声を聞いた瞬間から。

世界が止まったような感じがした。

後ろから、足音が聞こえる。

見れない、否、見たくなかった。

見れば死ぬと思えたから。

”彼”にとって自分が敵ではないと分かっている、見たくなかった。

流れる汗は止まらない。

一歩一歩、近づいてくるのがわかる。

一歩、歩く音が聞こえるたびに、心臓が跳ね上がる。

呼吸は荒く、短い。

足は、生まれたての馬のように震え、立つのもやっと。

手は、初めて人に銃口を向けた時のように、定まらない。

それは、この場にいる全員がそういえる状態だった。

その間に、”彼”は震える当麻達を通り過ぎ、その巨軀を見上げ、言った。

『…消してくれよう』

同時に竜は、その恐怖を振り払うように咆哮し、カイザーに向けブレスを吐く。

インデックスの使った竜王の殺息とは違い、炎を纏わせた段違いの攻撃が迫るも、

カイザーは焦ることも無く、右手を迫り来る炎に向け、言う。

『ターボスマツシャー』

言うと同時に、動き始めこそゆっくりだったものの、すぐに腕の螺旋状の刃が超高速で回りだす。

炎がもう目前に迫った時、雄叫びのような声が響いた。

『パアアアアアンチッ!!!!!!!!!!』

嵐と竜巻を纏い、火を噴きながら黒鋼の拳は炎に向け放たれた。

.....

ズウン…

と、地震かと思うほどの地響きが体を揺らす。

竜の体は顔が完全に消え、左半身も無く、丸く抉り取られたような痕が残っている。

抉り取った正体が、赤い軌跡を残しながらカイザーに戻ってくる。ソレはカイザーの周辺を数回回り、何事も無かったかのように元の場所へと戻った。

ターボスマツシャーパンチ
カイザーの主武装の一つで、分かりやすく言えばマジンガーZで有名なロケットパンチである。

ただしZとは違い、腕についてる螺旋状の刃を超高速回転させ、貫通力を高め相手に向け発射する武装である。

無論、威力は天と地ほどの差がある。
説明終わり。

竜は倒されたことにより、光りの粒子となって消滅する。

その一部始終を見ていた全員が口をポカーンと開けて思考の海に潜っている中、カイザーの声が響く。

『当麻!!! 行けええええ!!!』

一

二

三

「…あ、ああ!」

行け、という言葉を理解するのに三秒かった。

走る

走る

走る

インデックスの元へ。

「おおおおおおー!!」

無表情のインデックスが何か呟き、再び魔方陣がインデックスの前に出現する。

「おらあー!!」

当麻は臆する事無く、歩を進め、右手で何の苦もなく破壊する。
再びインデックスは呟くが、もう遅い。

当麻は辿り着いた。

「辿り着いたぞっ！インデックス!!」

叫ぶ当麻。

インデックスは相変わらずの無表情で攻撃呪文を呟くが、当麻の右手が迫る。

「その、幻想を……」

右手は、インデックスに届いた。

「ブチ壊す……！」

パリン

と、ガラスの割れるような音が響き渡る。

「……」

インデックスがゆっくりと倒れ始める。

当麻は右手を上げたまま動かない。

静寂が場を支配する。

「終わった…のか？」

「ああ…どうやら、無事に終わったみたいだな」

「ぶはあ…」

当麻は思いっきり息を噴き出す。

『当麻、忘れるな』

「お？」

「おおっと…！」

安心して居るのも束の間、カイザーに言われ、倒れる寸前だったインデックスを当麻がギリギリで抱える。

「ふう〜、危ねえ」

「と…うま…」

「お疲れ、インデックス」

「うん…」

疲れているのだろうが、インデックスはトビキリの笑顔を見せた。
その様子を見ていたニヤニヤ顔の一方がポケットに手をつ突っ込んだ
まま歩いてくる。

「締まんねエ最後だな」

「うっせえ」

「ツハ…」

「ま、お疲れさん」

「ああ、助かったぜ」

安堵の息を出すと共に、
コッソソ
と拳を合わせる。

しかし、二人は気づかない。
黄金に輝く、破壊の羽がすぐ傍まで迫っていることを。

「上条当麻!!」

「アクセラレータ一方通行、クソツ!!」

神裂とステイルは叫ぶ。

同時に、神裂は剣の柄に手をかけ、ステイルは魔術の使用準備となる呪文を唱えるも、

この距離では間に合わない。

だが、できるだけ早く、速く、地を駆ける。

「え？」

「あん？」

当麻と一方の二人は、インデックスに向いている視線を神裂とステイルに移す。

その最中、視界の端に金色の何かが移る。

二人は必死でコチラに駆けてくる神裂とステイルに只ならぬモノを感じ、
全力で、上を向く。

見た目こそ、金色に輝きどこか神聖さが漂う羽、なのだが直感が告げる。

アレは不味いモノだ、と。

頭では理解した。

だが、それに至るまでが長すぎた。

もう羽は、目の前まで迫っていた。

『二人とも、動くなよ』

瞬間、嵐が凄まじい速度で通り過ぎた。

「..?」

「..?」

それも一瞬で終わったが、あまりの凄まじさに吹き飛ばされそうになった。

恐る恐る目を開けると、目の前まで迫っていた数枚の羽は綺麗に消え去っていた。

何が起こったのか。

頭を特急で整理し、聞こえたのはカイザーとなった緋延の声だと気づく。

「「緋延!」」

神裂、ステイルの後方、若干前かがみの姿勢のカイザーを見る。

『…ギリギリで間に合ったな』

やっぱりか。

と二人は思った。

「助かったぜ、サンキューな緋延」

「助かったぜ……」

そんな様子を少し離れた所で神裂とステイルはジッと見ていた。

「本当に……やったんだな……」

「ええ、これであの子も……」

小さく呟き、この場を去ろうとしたその時、

『どこへ行く』

カイザーが立ちふさがる。

「……あの子の記憶には、私達は敵として映っています」

「故に、僕達は去る」

そう言い、再び歩き出すが…

『また逃げるのか？』

その言葉を聞き、
ピタッ
と二人の動きが止まる。

「…」

『もう一度言おう、
また逃げるのか』

先ほどとは違い、微妙に間隔を開けてハッキリと言う。

僅かに震える二人。

すると、伏せていた顔を上げて神裂が声を絞り出す。

「…わ、わたしだっ、て…」

『わたしだつて…なんだ？』

「神裂…」

ステイルは、苦しそうな顔で神裂の名を呼ぶ。

「わたしだつて…あの子の所に行きたいですよ…でも、駄目なんです…」

わたしは…いえ、わたし達はあの子を傷つけすぎました。何回も何回も…

いくら記憶破壊魔術に踊らされていたとしても、あの子にやってきた事は消せません」

「…」

『だから…会う資格が無い、と』

「そうです…」

震える声で、苦しそうな顔で、今にも泣き出しそうな瞳で、神裂は言った。

顔は俯き、体は振るえ、拳から音が出るほど、その手は握られている。

ハア

とカイザーは小さく溜息を吐く。

『だそうだ、インデックス。』

お前の友達は、何も言わずにお別れをするんだと』

「「!!」」

少し顔を上げて…

カイザーは神裂とステイルの後ろの方に声を掛ける。

言葉を聞き、神裂とステイルは物凄い速度で顔を後方に向ける。

「あ…」

そこには当麻に支えてもらえながらも、しっかりと二人を見ている

インデックスの姿があった。

僅かな間があり、インデックスが喋りだす。

「…行っちゃうの？」

「う…そ、それは…」

「く…」

インデックス、神裂、ステイルは友達だった。
仲の良いどこにでもいそうな友達だった。
共に笑い、共に泣き、共に…

一年

僅か一年の付き合い。

人の一年とはなんと儂きことか。
短くもあれば長くもある。
楽しくも苦しい、それが一年。

彼らにとって、その一年はなんと楽しかったことか。

そして…

次の一年から、なんと苦しいことか。

まるで、夢のようなあの日々。

彼女は、そんな記憶すら無い。

無くされてしまった。

嘘を教えられ、植えつけられ。

神裂とステイルは何回も消した。

そういう記憶を。

たった一年分の、短くも充実した記憶を。

カイザーは思う。

記憶を無くす。

いや、無くさせる。

なんて悲しいことか。

記憶とはそいつが生きてきた軌跡。

記憶とはそいつが苦しんで、楽しんできた証。

記憶とは…もがいて、手を伸ばして、掴んできたモノ。

なんて憎いことか。

こんなことを仕掛けた奴を。

なんて…

怒り狂いたいことか。

不老不死となったこの身でも、記憶を失うのは怖い。

友と共に戦い、傷つき、笑い合い、悲しみ、後悔し、
喧嘩して…バカやって…無茶して…

怒られ、悲しまれ、恨まれ、憎まれ…

それが記憶。

道を外れたこともあった。

道を自ら塞いだこともあった。

けれど、進んだ。

転んだり、泥濘ぬかるみに嵌ることもあった。

だから進んだ。

それが記憶。

そいつが歩んできた道、軌跡。

だからこそ…

『インデックス』

「あなた…は…」

一目見て、インデックスは理解したのだろう。
魔神としての存在を。
故に恐れたが、次の言葉でその恐れは消える。

『マジンカイザーだ。』

そして、当麻の友達の黒鋼緋延だ』

「あなたが…緋延…」

事前に当麻に緋延のことは聞いていた。
自分のために、必死になって奔走してくれている、と。
そして、最も信頼している人物の一人だ、と。

当麻の信頼している人物。

それがマジンカイザーとは思わなかったが、だからこそ信頼できる。

『当麻から色々聞いていると思うが、詳しい事はまた今度だ。』

「うん、それで？」

『あいつら…知っているか？』

スッ

と神裂とステイルを指差す。

神裂とステイルの息を飲む音が聞こえた。

「…うーん…、知らないなあ。誰なの？」

なんだろうな。

嬉しくもあり、悲しくもあるその応え。

神裂とステイルは二人共固まっている。

『インデックス、ここから話すのは全て真実だ。
だから…よく聞くんだけ』

「…それは、とても辛いこと？」

『ああ、辛い、とても辛い真実だ』

「…うん、わかった。話して。」

『わかった、まずは……』

それから、知りうる全てを話した。
かつて友達だった神裂とステイルのこと。
記憶のこと。

”もしも”が起ころぬように施された自身にかけられた魔術のこと。

インデックスは黙って聞いていた。

僅かに震える瞳でジツとカイザーを見つめ、口を閉ざし、手を組み、ただ黙って聞いていた。

当麻、一方もカイザーを見つめてただ黙って、

神裂とステイルは話の節々で苦しそうな顔をするも、顔を伏せて聞いていた。

十分足らずで、話は終えた。

一呼吸置き、カイザーはインデックスに再び話しかける。

『インデックス』

「…なに？」

『彼らを…許すか？』

「…」

彼ら…神裂とステイルは黙っている。

喋る気は無いのか…

喋ることすらできないのか…

俯いて、ただ立っている。

「緋延、それはわたしを馬鹿にしているのかな？」

『いや』

「火織とステイルは友達だよ？」

それに、今までだってわたしを守るために苦しいこと色々やってくれたんだよね」「

クルッ

と神裂とステイルの方に体ごと向く。

「そ…それは、そうなんです…」

「けど、僕達は君を…」

「全部わたしのために、やってくれたんだよね。」

友達だって、大切だから我慢してくれたんだよね？」「

「…」「」

神裂とステイルは言葉が続かない。
その代わり、二人共ゆっくりと頷く。

その問いに満足したのか、
インデックスはクスツと笑い、

「二人とも、ありがとう」

その言葉を聞き、何か切れたのだろう。
二人は泣き出してしまった。

『…だそうだ、良かったなインデックス』

「アナタにもお礼を言っね、ありがとう魔神さま」

『む…なんだかその言い方は慣れんせいか、かゆいな』

「それじゃ、ありがと緋延」

『ああ』

そう言い、インデックスの頭を数回撫でる。

『さて、当麻、一方帰ろうか』

「ああ、俺はなんだか腹減ったよ…」

「サンセーだ、俺も腹減った」

そんな会話を聞き、インデックスの目がキュピーンと光る。

「緋延緋延、勿論わたしもだよね？ね？」

『ああ、大盛りでいいか？』

「ふふ〜ん、今なら三合は行けるよっ！！」

ビシッ

と人差し指を前に出してない胸を張る。

マジか…

今、三人の心が一つになった。

「あつ、火織とステイルも来るよね？」

「わ、わたしもですか？」

「…僕もかい？」

泣き終わった二人に話しかける。
若干目と鼻が赤いまだが。

「そつだよっ、皆で食べたほうが楽しいんだよっ」

と、インデックスは満面の笑み。

『諦める、神裂、ステイル』

「しかし…（名前を…）」

「報告とかもある…（…僕の名を）」

『そんなモノは後回しだ。
美味しいもん作ってやるから、来な』

クルッ

と再びインデックスの方を向く。

そこには、よだれを垂らしながらも目をキラキラさせているインデックスの姿。

ハア……
と観念したように息を吐き、

「わかりました、何か軽めの物をお願いします」

「僕も同じ物を頼むよ」

『了解だ、それじゃ皆帰ろうか』

時間は0:00を回り、日付が29日になって暫く経った時。

当麻とインデックスは疲労と食事をたらふく食べたので、死んだように眠っている。

一方も疲れたのか、食事が終わったら早々に帰ってしまった。

部屋の外、緋延と神裂とステイルはマンションの前で月に照らされていた。

「行くのか」

「ええ」

「あんまり遅いと面倒な事になるからね」

恐らく、

インデックスの首輪の破壊を報告すると連れ戻すなり新たな首輪を着けるなり指示が下るだろう。

そして最悪の場合、関係者の始末が最優先事項として下る。

それを思っているのだろう、神裂とステイルの顔が幾分か暗い。

「心配するな、アイツらには指一本触れさせない」

「…気づかれていましたか」

「そりゃそんな顔してればな」

「僕達も下手したらこれで最後になるかもしれない」

「そのことなんだが…」

何かあれば剣を握って俺を思え。

思ったことがそのまま伝わるから危機ならばすぐ駆けつける」

そう言われ、神裂はカイザーブレードを見る。

「…はい、わかりました」

「凄いな、どういう仕組みなんだい？」

「仕組みは特に何も。」

しいて言うならカイザーブレードも俺の一部だから、かな」

「なるほどね、さすがは魔神」

フッ

と笑い合う。

「では、私達は行きます。

美味しい食事をありがとうございます」

「また来ればお邪魔するよ」

「ああ、またな」

そう言い、神裂とステイルは去っていった。

「ふう…」

意外と疲れたな」

まさか竜と戦うことになるとは思ってもしなかった。

予想より弱かったのが救いだった。

けど、まあ疲れたことには変わり無い。

首をゴキゴキと鳴らし、欠伸を一回。

「お前達にもコイツらにも、悲しい思いはさせはしない」

そう、誰にも聞こえないように呟き、宇宙を睨み、部屋に帰っていった。

こうして、長い一日が終わった。

13 二十九日 記憶（後書き）

やっと一段落だ…。

以外と掛かってしまった…

クウガの方が思い悩んでいます。

再び再編すべきか否か。

うん…どうしようか…

感想とか要望みたいなモノあれば待っています。

ではまた次回。

13・5 二十九日 再び（前書き）

遅れて申し訳ありません。
色々あつて……ね。

どうぞ。

13・5 二十九日 再び

今俺はいつか美琴達と出合ったファミレスへと向かっている。
この前、俺のことを話す。なんて言っちまったからな。

本日も暑い。

本日の”予想”最高気温は34・6。
暑いっいたらありゃしない。

だがココは最先端の科学の集う学園都市。

街中にはミストなんちゃらとか言う水を霧に変えてそこらじゅうに
ばら撒く設備が街中にあるのだ。

濡れるのでは？

という疑問があつたのだがそこは科学の力で全く問題無し。特別な
散布のさせ方らしい。

このミストなんちゃら、この霧をばら撒くだけで温度が下がるとい
う優れたもの。

部屋の中で霧吹きを扇風機でやるのの規模がデカイバージョンだ。

これのおかげで学園都市の人々は通常よりも過ごしやすい夏を送っ
ている。

話が反れた。

目的地まではあと五分ほど。

それまでにザックリと説明しておこう。

朝起きると同時にタイミング良くケータイにメール。
美琴から、

From美琴

subなし

本文

今日空いているからあんたの話を聞かせなさい。

場所は前会ったファミレスで昼くらいで、じゃまたね。

というメールが届いていた。

思い出してみると、そんな約束をしたような気がする。

ついでに言えば、今日は特に予定も無いので特に躊躇もせず向かうことになった。

そんなこんなで到着したのがAM11:30。

見渡してみると美琴の姿はなく、広めの席を取りコーヒーを飲みながら待つとしよう。

それから暫く経つこと一時間。

時間はPM12:30を回ったあたりで美琴”御一行”到着。

…はて？

見てみれば美琴以外に見た顔が三人ほどいる。

前回、美琴と共にいた白井黒子、初春飾里に佐天涙子だったな。

何故いる？

「よう美琴、早速だが聞きたいことがある」

「何よ？」

「今日はお前一人じゃなかったのか？」

「あたしはそんなこと一言も言っていないわよ？」

なんだそのドヤ顔。
してやったりつてな感じ。
イラツときだが、まあいいか。と解決。

その間に、美琴達は席に着く。
配置は以下の通り。
正面に黒子、美琴、飾里の三人。
隣に涙子。

「で、何が聞きたい？」

「全部よ」

「全部ねえ……」

わざと聞こえるように溜息を吐く。

無論、何が聞きたいかなんてのは分かっている。

とはいえ、一から話すなんて面倒なこととはしたくない。

適当なことを話して信じさせればいいか。

「まず、あなたは”あの”マジンカイザーで間違い無いわね？」

「Yes」

「「「ええ!?!」」」

美琴以外が声を上げる。

「ちょ、ちょっとお姉様、どういふことですか?」

「どうもどうも……言葉の通りよ、黒子。

にしても……もうちょっと洗ってただけど

「まあ、ちょっと面倒だが知られても困るようなことじゃないから
な」

ここで暫く全員が黙ってしまふ。
恐らく思考を駆け巡らせているんだろう。

暫くの間があり、黒子が口を開く。

「いくらお姉様に言う事でも……信じられませんわ」

「ゴメン、御坂さん……私も」

「……同じく」

勿論、その答えは予想済みだ。

「そう言うと思っていた。

論より証拠、見せてやるよ。

ただし……」

一瞬、ほんの僅か緋延の目と胸が光り、腕が炎に包まれるのすぐに消え、

人間のモノとは思えない程の黒い鋼の腕が出てきた。

「腕だけな」

ニヤリと笑い、美琴達に笑いかけながら言う。

さて、真昼間のファミレスでそんなことやって大丈夫か？

と思うだろうがココは喫煙席と遮るように壁があり、尚且つ一番端の席を選び、

店員や他の客からの死角で+周りの客が居ない状態でやったから問題無し、だ。

そのあまりの変わりように言葉を無くす美琴達。

だが美琴だけは二回目というのもあり、他の者達よりの幾分か冷静だった。

「……部分だけの变身もできたの？」

「ああ、お前も見たことがあるだろ？セブンスミストで」

「やっぱり……」

あの時の黒い腕はあんただったんだ、どうりで」

モヤモヤが解決したって顔だな。

「で、信じてくれたかい？お嬢様方」

目線を移し、黒子、初春、佐天を見ると全員が頷いた。

「ええ、そこまでのモノを見せられれば信じるしかありませんわ」

と、ここで初春が口を開く。

「でも…いいんですか？」

「何がだ？」

「そんな簡単に見せて……」

その疑問はもつともである。
だが緋延は特に考える様子も見せずに簡単に言った。

「ああ、問題無いさ」

「そう……なんだ」

「ああ、でも今は秘密にしておいてくれると助かるな」

佐天はその言葉に引つ掛かりを感じて、思わず口に出してしまふ。

「今……は？」

「そ、今はまだ秘密に……な」

緋延はそれも気に止めず、人差し指を口に前に置き、シーのポーズをとる。

「さて、全部と言ったがこれで勘弁してくれ。
昼飯奢ってやるから」

「……」

最中である。

「本当はあたしだけの筈だったじゃない」

「ああ、そのことが……」

美琴はバツが悪そうに言うも、緋延は別に気にしてないようだ。

「そう気を病むことは無い、だから気にすんな」

そう言い、美琴の頭をポンポンと叩く。

「う〜……」

そう？ だったらいいんだけど……」

「お待たせしましたわ、お姉様」

「お待たせしました」

「お待たせ〜」

と、ここで三人が出てくる。

「揃ったか。

んじゃ、またな」

「え？帰っちゃうの？」

「ちと用事があるんだよ、悪いな佐天」

「そうなんだ……あ、あとあたしのごとは涙子でいいよ緋延」

「そうか？」

わかったぜ、涙子」

「あの、私も飾利でいいです緋延さん」

「りょうかい」

と、ここで黒子が近づいてきた。
そして、

「緋延さん……」

申し訳ありませんですの」

「……いきなりどうした？」

いきなり頭を下げ、謝罪を述べてきたのだ。

「貴方を危険な人物だと思い、疑いの目で見てしまつてさぞ不愉快
だつたと思いますの。」

その他にも色々とあるのですが……とりあえず謝りますの」

「あ……」

その程度のこととは割りと慣れてるからわざわざ謝罪なんかしなくて
もいいのに」

「ですが……」

「いいから気にすんな」

「あ……」

まだ何か言おうとしたので、数回頭を撫でる。

「わかったか」

「……わかりましたの」

「よし、じゃあお前らもまたな」

最後にポンと一回黒子の頭を叩き、背を向け歩を進める。

「気にすることはねえよ。」

ココに俺が居ることは近い未来、全世界が知ることになるかもしれないんだしな……」

その呟きは誰にも聞こえない。

13・5 二十九日 再び（後書き）

次回から吸血殺し《ディープ・ブラッド》編……かも。

あとリリカル始める……かも。

アドバイス・感想等待着っています。

ではまた次回。

14 八日 昼々夕刻 再会（前書き）

何の予告も無く、前最新話を消してすいません。

読み返したら非常に気に入らなかったので、

皆様には申し訳無いのですが消させてもらいました。

かと言って今回の話が出来が良い、という訳ではありません。
そこんところは生暖かい目で見てください。

では、ごうござい。

14 八日 昼々夕刻 再会

あれから特に出会いも戦闘も無く、緋延達は平和に時を過ごしていた。

七月も終わり、八月に入りもう八日が経とうとしていた時だった。再び時は動き出す。

新たな出会い、新たな敵が現れようとしていた。

昼、緋延はぶらりとファーストフード店に来ていた。

普段から料理を作り、昼の弁当を作ったり、

当麻、一方、インデックスにはほぼ毎日夕飯を作っている緋延もたまにはこういう場所にも行きたくなる。

とは言っても月一位なのだが。

そして、食べる物も決まっている。

今日はコレを食べよう、何て気は起きない。理由は単純、面倒だからである。

話が反れた、そんなことはどうでもいい。

ファーストフード店の独特の匂いを懐かしみながら、買った商品を食べ初めて数分が経った時だった。

「……いい？」

と、突然少女の声が聞こえた。

「ああ、どうぞ」

言いながら顔を上げ少女の姿を目に入れた。

インデックスと同年位の無表情な顔をした長い黒髪の巫女さんだつた。

今どきコスプレなんか珍しくない、一般化……とまではいかないがそれなりに浸透はしている。

ただ、凄まじい量の……何十個ものハンバーガーを両手に持っている点については無視だ。

そんなことを考えている間に巫女さんは席に着き、

ハンバーガーを手に取りるとモグモグと黙々と食べ始めた。

……。

お互い何も言わず、黙々と食べる。

緋延も食べかけの物を食べる傍ら、巫女さんを見ながら考える。

その細い体にどうやってたらその量が入るんだろうか。

凄まじく消化機能がいいとかか？

そう考えていると、ふとインデックスも大食いだと気づく。

なんだろうか、長髪でロリでつるぺったんな人種は大食いなんだろうか。

そんな考えを巡らせていると気になったんだろうか、巫女さんはこちらを見て尋ねてきた。

「どうかした？」

「ん？いや……今日も暑いな、て」

「大食い」なんてことをストレートに言つのも難なので、適当に言う。
すると巫女さんは食べる手を止め、言つ。

「今日の予想最高気温は36.2」

「そう言つてたな」

「私も暑い」

「そうだな」

「ココは冷房効いているから」

「確かに涼しいから助かるよな」

「うん」

会話終了。

お互い再び食べかけの物に手を伸ばし、食べ始める。

数分経ち巫女さんは何かを思い出したのだろう、手を止め再び緋延に話しかける。

「でも。問題が一つ」

「ん？なにかあったのか？」

問題、という単語に釣られて聞いてみる。

「帰りの電車賃。400円」

「ああ、それで？」

ココからどれほど離れているかは知らないが、この炎天下の中歩きで帰らなければならないのはご愁傷様である。

「手持ち残金。0円」

「まあそれだけの量買えばな」

「買いすぎ。無計画」

「自業自得だ、バカ」

「バカ」いう単語を言った瞬間、巫女さんの目に涙が溜まる。それを見た緋延は軽くパニックになった。

しまった、言い過ぎた。

ヤバイ、なんとかしないと……、なんとか？

どうやって？一発芸でもするか？いや、それはむしろ逆効果な気がする。

一番手っ取り早く泣くのを阻止するには……気絶してもらおうか？いや、さすがにそれは不味い。どうする……、そうだ！！

「そ………そうだ、俺が送ってくよ」

「グス………え？」

よし、食いついた！！

「今日は暇だしな、これも何かの縁だ」

「……何が目的？」

相変わらず無表情なのは変わらないが、明らかに警戒の目で緋延を見た。

そうきたか。

さてどうしたもんか。

こちららなんも目的と呼べるモノは持ち合わせていないし……。ましてやどこぞの万年色情魔の如く欲求など求めてはいないし。とは言っても見捨てるのも忍びない。

……。

よし、ココは穩便に済まそう。

プランBだ。

そう思うや否や、緋延は自分の財布の小銭入れを覗き込んだ。

運良く五百円玉が二個あり、ソレを取り出し巫女さんの前に置いた。

「これで帰れるだろ」

先ほどとは打って変わり、巫女さんはキョトンとした顔で緋延を見た。

「……………どうして?」

「どうもどうもないさ、俺…………俺達の性分でね」

巫女さんは再び五百円玉を見て、顔を上げて緋延に言った。

「私の体が目的じゃないの?」

「…………ブフウ!!?」「」「」

俺も含め、周りの客も数人噴いた。

まいった。

こっぴどい子にはなんて言えば正解なんだ。

…………駄目だ、思い浮かばない。

しょうがない、適当に言っつてこの場を去るか。

「そうかそうか、なんでそう思うんだ？」

と、優しく質問すると以外な答えが返ってきた。

「私。魔法使いだから」

あちゃー……。。

こつこつ子、なんて言うんだっけ……。そつだ、残念な子だ。

……。
さつさと行くか。

「そうか。」

じゃあな、魔法使いさん」

そつ言つと早足でその場を去るつとすゝむと、

「まっつて」

呼び止められる。

一回溜息を吐き、向き直る。

「なんだい、魔法使いさん」

「お金。ありがとう」

一瞬呆けてしまった。

なんだ、ちゃんと礼は言えるのか。

「ああ、次からは気をつけるよ」

「うん。分かった」

「じゃあな、気をつけて帰れ」

以外だな、と思いながら店を後にする。

その後、当麻とインデックスが店にやってきてその巫女さんと一悶着あったりなかったり。

緋延がソレを知ったのはかなり後のことであるが。

その日は、これで終わりなんてことにはならなかった。
その少女と会うことで、その日は始まったのである。

- - - - -

大量のハンバーガーを食べる巫女さんをガラス越しに見流し目的の
場所へと向かう。

店から大分離れたところで、名前を名乗るのも聞くのも忘れた事に
気づく。

自分にしては珍しく忘れたものだと思う。

緋延は必ずと言っていい程、如何なる状況でもよつぽどのがない
限り名前を名乗ると決めている。

それを今日に限って忘れた。

暫く頭の中がソレでいっぱいになり、
なんだかスッキリしない気持ちがあるが目的の場所に着くまで続くことと
なった。

そんなこんなで裏路地に入り、さらに入り組んだ狭い通路を暫く歩き停止。

誰もいないことを確認すると、緋延の姿が一瞬で消える。

風が耳を塞ぐ。

緋延の目に映るのは大空。

夏の蒼穹、雲一つ無い宇宙へと続く道。

名残惜しいが、空の青さを楽しむのはまた今度と言いつつ聞かせ、ビルの上へ着地、待ち合わせて既に着いている目の前の人物二人に声をかける。

「よう、久しぶり」

片手を挙げながら、久々に会う友人二人に言った。

「久しぶりです、緋延」

「久しぶりだね」

そこには、神裂火織とステイル＝マグヌスの姿があった。

「元気そうだな」

「ええ、見ての通りです」

「僕も同じく、だ」

「そいつはなにより」

フツ

とお互い笑い合う。

神裂とステイルの二人のその表情を見て、緋延は思った。

以前の何処か悲しく何かを無理やり押さえつけたな雰囲気はもう無く、

恐らくコレが本来の……明るい雰囲気、人間らしい表情がソコにあった。

それを見て安心した緋延は、気になっている事を聞くことにした。

恰好は初めて会った時と同じ恰好。

神裂の七天七刀がカイザーブレードに変わっている以外は。

わざわざ作ったのだろう、ご丁寧に皮製の鞘に入っているし。

「報告に対しての向こうの対応はどうなった？」

「ええ、それも丁度言おうと思っていたところです。」

それ”も”？

その言葉に緋延は何か嫌なモノを感じた。

「とりあえずはインデックスについては現状維持、だそうですね」

「……何も無し、か。アレだけのモノを着けといてこの処遇……」

「僕達も特にお咎め無し、不気味ったらありゃしないよ」

「俺もそう思う、剣に関しては？」

「剣に関しても何も無し、です」

「……そうか」

緋延は思考する。

考えが読めないな。

俺を狙うにしてもあの日以来、そんな気配は一つも感じられない。

当麻・一方・インデックスに対してもそんなモノは感じない。

神裂に貸し出し中の剣、カイザーブレードを奪うのは無理やりにも出来た筈なのにソレも無し。

インデックスに新たな首輪を着けるといふ処置もしない。
何を考えている？

……わからんな、また後で考えるか。

「わかった、で？もう一つの用件は？」

「うん、吸血殺し《ディープブラッド》って知っているかい？」

「……？いや、聞かないな」

「まあ名前で大体の察しは着くだろうけど、
吸血殺し《ディープブラッド》は【カインの末裔】のみを殺す力の
ことさ」

カインの末裔。

「……吸血鬼か」

「そう、吸血鬼ドラキュラで知られるあの吸血鬼だよ。
でも勘違いしないでもらいたい。

今回僕達が来たのは吸血殺し《ディープブラッド》を利用する側の
人間を止めに来たのさ」

利用……か。
吸血鬼を殺す力なのだから恐らくは特定の吸血鬼を消したいの
だろう。と推測。

「なるほど、それを手伝えと」

「理解が早くて助かるよ」

「これくらい理解できんと人としてどうかと思うぞ」

「それもそうだね。で、彼の起こそうとしている事を簡潔に話すよ。
彼、錬金術師アウレオルス「イザードは吸血殺し《ディープリッ
ド》を使って、
吸血鬼を呼び寄せ彼らの長年の魔術知識を得る、または利用しよう
としている」

「なるほどねえ。」

「不老不死の化け物だからこそ得られる人間には到達不可能な領域の
知識を得たい、と」

「そ。で、彼の目的なんだが……」

「ん？知識を得るのが目的なんじゃないのか？」

「それはついでさ、本当の目的は……インデックスの救出」

「……」

インデックスの救出。

辿り着く答えは只一つ。

アウレオルス「イザードという男は神裂、ステイルと同じ境遇を持つ男だということ。

いや、神裂、ステイルは持っていたになるが。

「読めたぞ、アウレオルス「イザードは吸血鬼の知識を得てインデックスを救おうとしているんだな」

「その通りだ、緋延。

そして事態は既に危険なところまできている。

吸血殺し《ディーブラッド》は恐らく既に彼の手に落ちている」

話を聞く限り、アウレオルス「イザードはインデックスが既に救出されている事知らない。
となると……！

インデックスも危ないな。

「不味いな、インデックスも危ない」

「いや、インデックスは大丈夫だ」

「ん？なぜそう言い切れる」

「貴方に会う前に上条当麻と一方通行に言ったからですよ」

神裂が言う。

なるん。

なら安心……か？

もしもがあるからな、油断はできんが。

—まずは安心か。

「じゃあ、俺達の目的は……」

「吸血殺し《ディープブラッド》、姫神秋沙の救出だ。
で、コレが彼女の写真だ」

ステイルはそう言うと懐から写真を取り出し、緋延に渡す。

「な、なんだと!？」

それを見た緋延は驚愕した。

そこに写っていたのは先ほどの巫女さんだった。

吸血殺し、緋延はその名の通り吸血鬼のみを殺す能力と相まって、能力者自身も相当の使い手だと考えていた。

だがどうだろう、この写真に写っているのは少女。

とても吸血鬼を相手取ることなど無理に等しいと思わせる華奢な少女。

インデックスや当麻、一方と大して年も離れてはいないだろう少女。そこには……昼間に偶然会った大食いの巫女さん、姫神秋沙が写っていた。

そして、赤い血を思わせる字で確かにDEEP BLOODと書かれていた。

「まさか……この子が」

「なんだい？もしかして知り合いかい？」

「いや、知り合いつて程の仲じゃない。昼食の時に偶々合い席で軽く話をした位だ……」

「そうなんですか……偶然ですね」

「だとしたら、嫌な偶然だな」

全く、世の中広いんだが狭いもんなのかもな。

いささか取り乱した心を落ち着かせるため、一回深く深呼吸。

……よし。

「錬金術師か……ステイル、お前のことだから当麻も来るんだろ？」

「流石、今回は彼が居ないと厳しいんだよね」

「まあな、幻想殺し《イマジンプレイカー》はそういう”モノ”には天敵だしな」

そこで全員がピタツと話を止め、一日間があり、全員の目つきが変わる。

「……場所は三沢塾、そこはすでに彼の城となっている筈だ」

「油断大敵、だな」

「私は上条当麻と共に行きます、先に行っていて下さい」

「いや、迎えは僕が行くよ」

「……わかりました」

「わかった」

そう言うとステイルは足早にこの場から去って行った。

「それじゃ、行くうか」

「ええ」

時刻は夕刻。

三沢塾に突入まで後、数時間。

本来なら、今日はコレだけで終わる筈なのだ。

がしかし、明確な殺意を宿した何かが緋延に向かい動き出していた。

14 八日 昼々夕刻 再会（後書き）

二月だよ……。

リリカルの話ですが、未だに決まっています。ガンダム、エウレカ、DMC、etc……。破壊魔定光久々に読んだらこれもいいな、とか思っている位なので。ポンコツも一様”デバイス”だからなあ……。アクティブデバイスだけど。

アドバイス・感想等待着っています！！

ではまた次回。

14・6 八日 迫る影（前書き）

おばんです。

最近は少し温かくなってきたかな？
— 昨日の雪には苦労したが……。

短めですが、どうぞ。

14・6 八日 迫る影

窓のない部屋。

ドアもなく、階段もなく、エレベーターも通路もない。

建物として全く機能していないそのビルは、

大能力者《レベル4》相当の空間移動テレポーターがいなければ出入りすることができない。

その部屋の中央、怪しく光るガラスの中に逆さに浮いている者、アレクスター・クロウリーは土御門から背筋の凍るような報告を聞いていた。

「もう一度……言ってくれないか」

「信じられないのも無理ないにや〜、俺も今でも嘘じゃないかって思っているくらいなんだしにや〜」

アレクスターの信じられないという表情に土御門はいつもの調子で仕方ないと返す。
しかし、パツとそのふざけた雰囲気^{キョウキ}が張り詰めたモノ^{モノ}に変わる。

「間違い無い、三つの凄まじい熱量を持つ巨大な何か^{何か}が日本に向かっている。

その熱量のパターンが……数十年前の炎の三日間の”奴ら”に似ているんだ」

「まさか……彼はあの時に全てを消し去ったと……」

いや、残骸を何処かの国が回収してこの数十年で復元させたのか？」

「考えられなくも無いな」

フム……

と手を顎に当て、一瞬の間。

「日本政府は？」

「日本に限らず、世界中の政府が混乱している。

またあの三日間が再び起こるのかとビクビクしているよ。

幸い、確認されているのがあの時のような凄まじい数じゃなくて、

三つのみってのが未だに警戒で収まっている理由だ」

確かにあの時から数十年経ち、世界の傷はほぼ治りつつある。

がしかし、人々の……

当時を経験した者達からすればたとえ反応が三つだろうと、その時の恐怖と絶望が蘇るのは必須。

警戒で収まっているとは言っているが、実際は一声かければ全戦力が即出撃可能だろう。

「……彼に知らせておくか」

「そのほうが良いと思うがな」

「……わかった、君はどうする？」

「シエルターに避難させてもらおうよ」

「その方が懸命だ」

手をヒラヒラと振り、土御門は空間能力者と共に去っていった。
それを確認するや否や、アレイスターは行動を起こす。

第一級警戒態勢、市民を各シエルターに即刻避難。
風紀委員、警備員はその誘導を指示。

「さて……緋延と連絡を取らなければ」

ピ・ポ・パ・と電話のボタンを押し、発信。

トゥルルルル……

発信音が右耳に響く中、アレイスターはレベル5をどうするかと考える。

反応が三つ、つまり三機。

一方通行を筆頭に戦闘に使えるレベル5を徴収し、三機に割り当ててはどうか。

マジンカイザーがどれほどのモノか分からなかったあの時とは違い、今の状況で仕掛けてこられて無差別破壊が目的なら一対三は少々不味い。

マジンカイザーなら心配無いと思うがもし、もしだ、その内の一機が特攻機仕様だとしたら。

その特攻機仕様が本命で他が足止めだとしたら。

その可能性は0ではない。

レベル5の攻撃が効く効かないは後回しで、被害を抑えるために出てもらうか。

と、ここで電話が繋がる。

彼の声が聞こえるかと思いきや、

耳に聞こえてきた応答にアレイスターに冷や汗を掻かせることとなる。

「お掛けになつた電話は、現在電波の届かない場所か、電源が入っていないため繋がりません」

「なん……だと……!!」

アレイスターがそんな時。

緋延、当麻、ステイル達（神裂は別用事）は以外とピンチに陥って
いたりいなかったり……。。

14・6 八日 迫る影（後書き）

雨だ。

雨は好きです。

特に理由はありません、ただなんとなく好きなんです。

ISの小説増えてきたなあ。やっぱりアニメ化の影響か。

実は結構前からガンダムIS化で、

俺の好きなガンダムランクトップ3のF91、クロスボーンで書き溜めしていたりする。

出そうかどうか迷っていたりする。

次回、黄金練成？恐らくチヨイ出です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9041n/>

とある物語の魔神皇帝

2011年3月21日07時08分発行